

# 熊の童話

2011年3月11日のドリームタイム儀式

The Japanese great spirit's story, 2011/3/11.



**Novel by**

**m★A★S★H**

**Published in 2013.**

**"The Japanese great spirit's story, 2011/3/11"**

**First issued by Ameba Blog, in 2011.**

**Image quotation by**

**Michio Hoshino, Mitsuhiko Imamori, etc.**

**Quote-images are thumbnailing for Amazon-widgets.**

## はじめて読まれる方へ

みなさん、こんにちは。はじめまして。

僕は、M☆A☆S☆Hと申します。M☆A☆S☆Hと書いて「まっしゅ」と読みます。

「M☆A☆S☆H」の意味は、昔のアメリカ映画に詳しい方ならご存知かと思います（笑）

この度は僭越ながら、「[Thich Quang Duc] 師は絶え間無く燃え滾る」という電子書籍向け小説をドロップしています。

ただし、その小説は恐らく……薄気味悪いと思うので（苦笑）、口直しのスイーツ感覚でこの小説、「熊の童話」をカップリングします。

「[Thich Quang Duc] 師は絶え間無く燃え滾る」は有料コンテンツなので、興味ある方へお薦めします。

「熊の童話」は、アメーバブログに掲載したものをローカライズして、無料公開します。

M☆A☆S☆Hの名刺がわりに「熊の童話」をお楽しみ頂ければと思います。

それでも、「熊の童話」は震災直後にアメブロで連載して、震災復興や原発事故問題を主題にしたものなので、重い内容です。

その分、ブログ掲載を意識した平易な文章は読みやすいと思います。

あの時は、真剣でした。

もちろん、今も真剣な気持ちは変わらないつもりですが、あの時と比べて、だいぶ余裕が生まれているのも事実です。

かえって、今の時代に「熊の童話」を読み返すのは……恥ずかしいかもしれない。

そんな複雑な気持ちを抱きながら、あえて、電子書籍の世界に「熊の童話」を残したいと思います。

読まれる方々も、それぞれの想いを抱いて頂ければ嬉しいです。

2013年6月30日 M☆A☆S☆H

### 追記

この小説はアメーバブログ掲載時と同じ状態で電子書籍化しています。

アメブロでは小説内に挿入する低解像度画像を「イメージ画像」と表記し、「引用元」として、Amazon サイトの引用元書籍の販売ページへリンクしました。

電子書籍化に於いても同処理を行い、画像を Amazon ウィジェットとして扱いたいと思います。

# 熊の童話 目次

## 第一話 「腕時計の針を止めて」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/9/1)

## 第二話 「天（そら）と大地の唄」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/9/17)

## 第三話 「プレゼント」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/10/1)

## 第四話 「雨ニモマケズ」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/10/15)

## 第五話 「だけど、僕らは今、ここにいる」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/11/3)

## 第六話 「がんばってみるよ、やれるだけ」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/11/20)

## 第七話 「雨は夜更け過ぎに雪へと変わる」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/12/1)

## 最終話 「最善であることを願おう、不安拭いながら」篇

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/12/24)

## 熊の童話・第一話～「腕時計の針を止めて」篇



(イメージ画像 今森光彦 里山物語 - SATOYAMA In Harmony with Neighboring Nature から引用)

イーハトーボの山の中。

夏が、過ぎようとしていた。

木々は、青々と葉を茂らせて、残暑の日差しを和らげてくれた。

足元には草々が、歩くのを邪魔するくらいに高々と伸びていた。

青年は、その場所を、ひとりで歩いていた。

「あまり遠くまで行くと、熊に出会うぞ」

山に入る前に、村人に告げられた青年であったが、臆せずに前へと歩き続けていった。

ガサッ。

目の前に…大きな黒い固まりが浮かび上がる。

それは、熊、だった。

…青年は怖がらずに、穏やかな表情で、熊に語りかけた。

「熊さん、僕を、食べてください」

熊は答えた。

『食べられると痛いぞ』

「それでもいいのです。僕は、生きていても…仕方がないのです…」

熊は険しい表情で、か細く囁く青年を見つめていた。

そこへ、兎がぴょこんと現れる。

『くまさん、どーしたの？』

兎は、持っていたニンジンをポリッと、かじった。

青年は、熊の足元に寄り添う兎を見つめて、呟いた。

「兎さん、美味しいそうな人参だね。僕が、そんな風に食べられたら…どうなるのかな…」

『んもう！ 人間なんか食べないよ！ 野菜にしようよ☆』

無邪気に笑う兎を見つめながら、青年はまた、憂いの表情で囁いた。

「そうか。野菜の方が、役に立つのかもしれないね…」



(イメージ画像 星野道夫の仕事3-生きものたちの宇宙 から引用)

…突然、熊は目を見開き、青年に問う。

『お前は、役に立たないから気弱になっているんだな？ だったら、役立つことをすれば、問題は解決するぞ！』

しかし、青年は反論する。

「いや…駄目なんですよ、僕は…」

熊の表情が曇った。

『…わかった。ダメになっているのを認めてもらいたいから…死にたいのだな？ ならば…歯を食いしばれ！』

熊は吠えた！

空が引き裂かれる！

熊の巨大な爪が、青年を目掛けて、振り降ろされた！

バキッ！

…青年は身を屈めて爪を避けていた。

背後にある大木が、音を立てて崩れ落ちる。

『…何故、避ける？　お前が望むなら、お前の首は、あの木の様にへし折られるのだ！』

熊は青年に飛び掛かった！

青年は怯えて、後方へ逃げる。

後方は…崖だ。

青年は…足を踏み外してしまった…。



(イメージ画像 [今森光彦 里山の道](#) から引用)

…空に浮かぶ入道雲は、青と白のコントラストを描いている。

崖の下では青年が、熊と兎に介抱されていた。

幸いと言うべきか、彼は深い傷を負っていなかった。

熊は、青年を抱きかかえた。

兎は、彼の傷口を舐めていた。

…熊が、そっと話しかける。

『あれを見てごらん』

青年は身を起こして、眼下に広がる麓の空間を眺めた。

そこには、人間が住む街があった。

街が、存在している…はずだった。

全ては、津波に、押し流されてしまった。



(イメージ画像 今森光彦 里山物語 - SATOYAMA In Harmony with Neighboring Nature から引用)

…声、が、聴こえてくる。

『くまさあ～ん☆』

眼下から、人間の子供達がいっぱい、やってくる。

みんな、屈託なく笑っている。

光り輝いている感じがした。

青年は穏やかな表情に戻り、熊に問う。

「熊さん、あなたは人間に慕われているんだね」

熊は、子供達を見つめながら、答える。

『何故、こんな所に人間が来ると思う？』

青年は改めて、子供達を凝視した。

確かに、子供達は光り輝いていた。

その身体は、日の光を浴びて…透き通っていたのだ。

『そう、あの人間達には肉体が無い。あの子供達は、津波で流されて死んだのだ。…それでも、魂は生きている。だから、ここにやってくるのだ』

「ここに…」

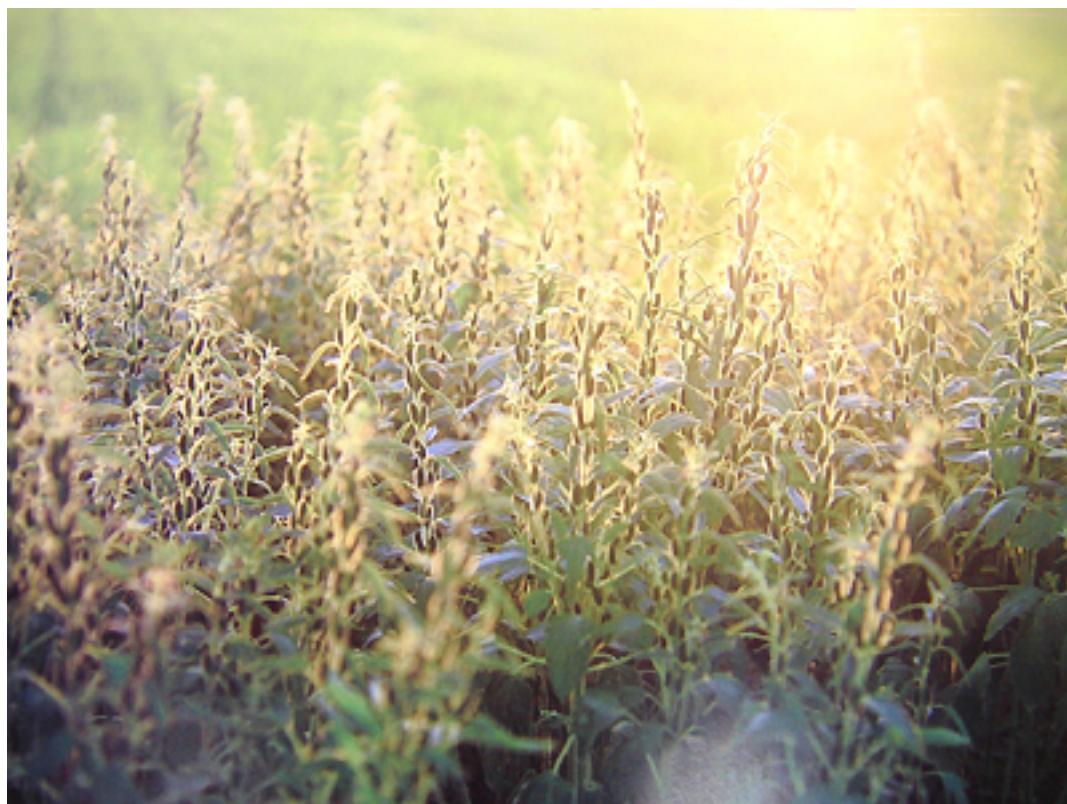
青年は熊の言葉を繰り返した。

『何故だと思う？』

目を細めながら熊は、青年に鼻面を向けた。

『さあ！ みんなでニンジンを作りにいくよっ！』

兎は子供達の前へ飛び出して、かわいい気勢を上げた。



(イメージ画像 今森光彦 里山物語 - SATOYAMA In Harmony with Neighboring Nature から引用)

再び、山の奥へ入ると、そこには、秘密の野菜畑が待ち構えていた。

子供達は、それぞれの持ち場へと散っていく。

夏収穫のキュウリやトウモロコシを剪定したり、雑草を取る者がいれば、別の畑では、夏蒔きのニンジンやブロッコリーの種を蒔きはじめる者がいた。

兎は、ニンジン・グループの隊長として、大活躍していた。

熊と青年は、二人だけで畑から離れて、働く子供達を見守っていた。

『…なあ、あんた…』

熊は青年に語りかける。

『もし良かったら、子供達の面倒を見てくれないか？』

青年は、熊の方へ振り返る。

『あんたが本当にダメじゃあなかったら、子供達の魂を、昇華、出来ると思うんだ』

…その時、子供がひとり、畑仕事に夢中で気づかずに、崖の近くへと歩んでゆく。

「危ない！」

青年は咄嗟に飛び出して、その子の肩を掴む。

…そう。青年は、透明な子供の身体を、支えることが出来たのだ。

「ライ麦畑…ではなくて、野菜畑のキャッチャー、か…」

青年は微笑んだ。

「暫くは、ここで、暮らしてみよう」

青年の気持ちは、最初、山に入った時と比べて…変わりはじめていた。



(イメージ画像 今森光彦 里山物語 - SATOYAMA In Harmony with Neighboring Nature から引用)

(…第二話へ続く…)

## 熊の童話・第二話～「天（そら）と大地の唄」篇

それは、秋の収穫祭の出来事だった。

青年は、光る肌を持つ子供達と一緒に、秘密の野菜畠で働いていた。

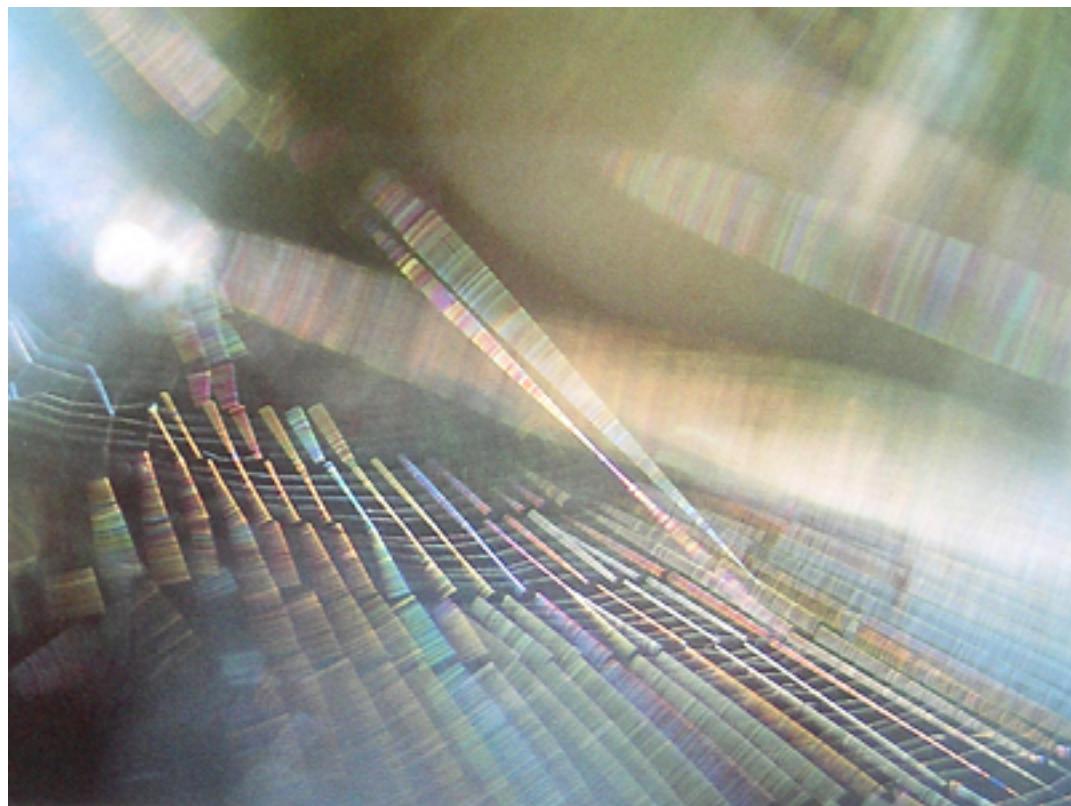
『ねえ、お兄ちゃん…』

光る肌の少年が、青年に話しかける。

「…うん？ どうしたのかな？」

汗を拭いながら、青年は答えた。

『見てよ…ほらっ☆』



(イメージ画像 瀬川強 宮沢賢治 シーズン・オブ・イーハトーブ number2 Summer すきとおった風 から引用)

いたずらっぽく笑いながら、少年は、すうっと、指を動かした。

すると、指揮者に従うクラシック交響楽団のように、トマトの葉が、さざなみの音を立てた。

青年は、ええっ？ …という顔になる。

少年の隣でしゃがんでいた少女が、青年の方へ振り向く。

彼女は、泥んこが付いた頬で、にっこりと微笑んだ。

そして、両腕をぎゅっと胸に抱えて、縮こまつたかと思うと…、

『ばあ～ん☆』

と叫んで、大きく背伸びをした。

少女のかわいい声に併せて、トマトの茎が、勢いよく伸び上がった！

青年は、高々と伸び続けてゆく茎を、見上げていった。

気がつくと少年は、『か～め～は～め～は～』と呟いている。

腰を落として、両手の掌を重ねて、おにぎりを作るよう膨らませゆく。

掌の動きに併せて、トマトがゴムボールのように膨らんでいった。

青年は啞然としながら、少年少女の仕草と、急成長する野菜を見つめていた。

…ふと、青年の表情が曇る。

(昔、放射能で巨大化する生物の映画を観た)

(半年前、イーハトーボの近隣にある原子力発電所で、事故があった)

(炉心溶融が起きた、というニュースを聞いた)

(100km圏外まで放射性物質が飛散している、というニュースも聞いている)

…脳裏に走った情報を振り払い、青年は、畠近くに設営した居住用テントへ駆け込む。

そこから、トランシーバー形状の小さな機械を取り出して、また畠へと戻っていった。

機械のスイッチを入れる。

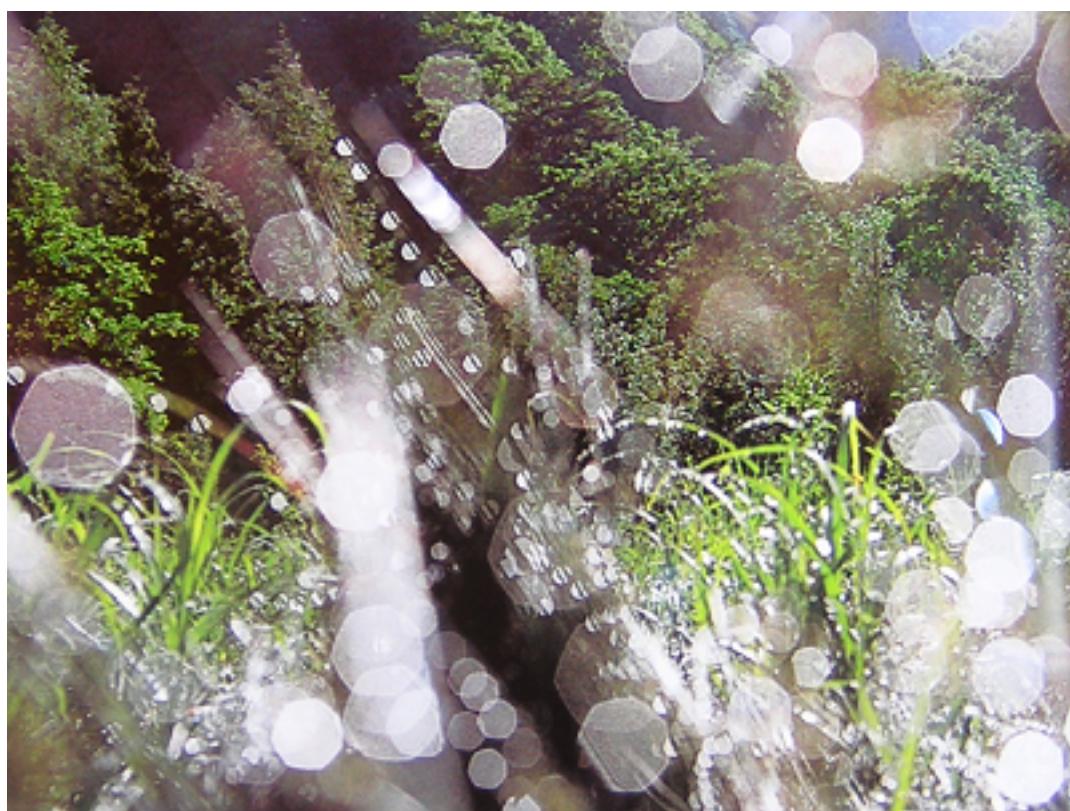
【 $3.91 \mu\text{Sv/h}$ 】と表示されて、画面全体が赤く点滅した。

「危ない！　ここから離れるんだ！」

青年は叫んだ！

子供達の仕草が止まった。

野菜も、いつもの大人しい植物に戻った。



(イメージ画像 瀬川強 宮沢賢治 シーズン・オブ・イーハトーブ number2 Summer すきとおった風 から引用)

『…どうしたんだ？』

熊が現れた。

「熊さん、この場所は危険だ！　汚染されている！」

青年は顔を強張らせて、早口でまくし立てたが、

『汚れているなら、雨が降れば、洗い流される』

と、熊は返した。

青年は首を左右に振った。

そして、呑気な熊の目を覚ますかの如く、青年は主張を続けていった。

「毒性の強い放射線なんです！　その証拠に、野菜が急激に成長します！」

『それは、天（そら）と大地の唄を聴いたからだ。人間は、その唄を知らないだけだ』

「違うよ熊さん！　だって、ガイガーカウンターでも、基準値を超えたマイクロシーベルトの値が表示された。科学的に証明されたんだよ！」

『それは、人間の都合だろう』

「…そうじゃない！　みんな、同じだって！　自治体に連絡して、ここを除染しなければ、子供達の健康に響く！　特に子供の身体は、放射線に…」

(子供達の身体?)

…青年は、口をつぐんでしまった。

そして…日光を透過する身体を持つ子供達を、見つめ直した。

(幽霊になっている子供達に…除染を施す…)

(僕は…何を言っているのだろう…)

青年は黙った何ん、その場に立ちすくんでいた。



(イメージ画像 瀬川強 宮沢賢治 シーズン・オブ・イーハトーブ number3 Autumn ガラスのマント から引用)

『…ねえ、お兄ちゃん』

先程の指揮者の少年が、子供達の群れから離れて、青年に歩み寄った。

『これ…あげる☆』

少年の掌には、黄色いトマトが乗っていた。

それは、まぶしくらいに原色の、黄色のトマトだった。

『僕と、妹のネリとで、二人で育てたんだ』

少年の隣には、先程の泥んこ類の少女、ネリが立っている。

『ペムペル兄さまは、黄金を作ったのよ。立派でしょう☆』

「…黄金？」

青年は、ペムペル少年から、黄色いトマトを受け取った。

それは、ずしり、と重かった。

…トマトが、発光する。

文字通りに、黄金色に。

光は青年を呑み込み、ペムペル少年を、ネリ少女を、包みながら光輪を広げてゆく…。

…再び、野菜畠が、ゆらゆらと動きはじめる。

天（そら）と大地の唄が聴こえてくる。

まるで、鈴蘭とヘリオトロープの花の香りを漂わせた、切れ切れの風のように…。

…小さな家くらいの大きさの、白い、蚊帳のような、箱のようなものが歩いてくる。

その箱の中には、象の足が、ゆっくり上がったり下がったりしている。

周りには肌が真っ黒の黒ん坊が四人、目玉をギラギラさせながら踊っている…。

青年は、光の中で、イーハトーボの幻燈の洗礼を受けた。

熊は、彼を、遠くから見守っていた。



(イメージ画像 瀬川強 宮沢賢治 シーズン・オブ・イーハトーブ number3 Autumn ガラスのマント から引用)

地面に落ちているガイガーカウンターの数値が、【 $3.91 \mu\text{Sv}$ 】から【 $0.19 \mu\text{Sv}$ 】へと変わり、そして【 $10.9 \text{mSv}$ 】となり、【 $0.01 \text{nSv}$ 】へと刻々と変化していった。最後には、デジタル数値は文字化けを起こして…突然、アルファベットが表示された。

### 【COGITO ERGO SUM】

(我思う、故に、我在り)

そして、人間の機械は破裂した。

熊は、役に立たなくなった人間の道具を口にくわえて、畠を後にした。

(…第三話へ続く…)

## 熊の童話・第三話～「プレゼント」篇



(イメージ画像 Teruhisa Kitahara, Yukio Shimizu, 1000 Tin Toys [Paperback] から引用)

喧騒の街の只中に、青年はトラックを停めた。

荷台には、野菜がたっぷり積まれていた。

黄金色のトマト。

お菓子のように甘いオレンジ色のニンジン。

黒光りして太った秋ナスは大人の雰囲気がする。

そして、ブロッコリーとカリフラワーが、緑と白の交響曲を、もしやもしやと奏でていた。

「あら？ 産地直送の有機野菜かしら？」

朝の用事を済ませた若い主婦が、運転席に座る青年に向かって、コンコンと窓を叩く。

振り向いた青年のルックスに、ちょっと頬を赤らめて、主婦は彼に話しかけた。

「…あのう、このお野菜はどこから来たのですか？」

「イーハトーボです」

青年は爽やかに答えた。

「えっ？ 外国？」

主婦は慇懃無礼に問い合わせる。

「東北のことですよ。エスペラント語で、宮沢賢治という詩人が名付けたんです」

「…ひょっとしたら…フクシマ？」

主婦は、急に苦笑いの表情になり、ゴメンなさい、と頭を下げる、その場を去った。

青年は、ふう…、と、ため息をつく。

「それじゃあ、売れねーよ！」

野太い声が聞こえてきた。

声の方向へ顔を向けると、トラックがもう一台、青年のトラックに横付けしていた。

運転手は、体格の良い年輩の男だ。くすんだ色の軍服を着て、白髪混じりだった。

「あのオバチャン、福島県のことを、カタカナ、で呼んでたよなあ…」

男は運転席から降りると、青年の席をゴンと叩き、親指を立てて、降りろ！、と合図した。

「慌てなくてもいい。ゆっくり、やろうぜ」



(イメージ画像 Teruhisa Kitahara, Yukio Shimizu, 1000 Tin Toys [Paperback] から引用)

二台のトラックは、仲良く並んで路駐していた。

青年と白髪混じりの男は、トラックの隙間で、目立たないように座り込んでいた。

男はタバコを吸い、青年は黄金色のトマトを手に乗せて、それを見つめていた。

道行く人々は誰も、二人の様子を気にしていない。

「…おい、あの目の前にある建物、何だか判るか？」

男は交差点の向かい側にそびえ立つ、青い看板が設置されたビルディングを指差した。

その看板には、Sofmap、というロゴが書かれている。

「昔、この場所で、事件があった。無差別で、ダガーナイフで、刺されていった…」

青年は、黄金のトマトから青い看板へ、視線を移していった。

「だから俺達は、無差別で、花を、配ったんだ」

「…花を？ …無差別とは、どういう意味ですか？」

青年は問い合わせた。男は照れ笑いをした。

「それは、俺の友達の提案だ。俺も、友達も、ワーキングプアでな、とある山奥の工場で知り合った。…不思議な友達だったよ。文学が好きな、頭の良い奴で、俺のことを何故か、ケイ、と呼んだ。アルファベットの【K】、だ。満月の夜に海で溺れる男の小説があって、主人公の名前を俺に付けたらしい。…俺は泳げるんだぜ！」

「Kの昇天、ですね。梶井基次郎の小説です。僕も好きですよ」

青年はそう返した。

Kと呼ばれた男は、にこにこ、しながら、思い出話を続けていった。

「まあでも、俺達は所謂、ワーキングプア、だ。色々と訳ありで、こんな所へ来ちました。むしゃくしゃ、する時もある。だから、ダガーナイフの事件みたいに、俺も…と、口走ったら、友達が止めた。…なんて言ったと思う？ 【どんなことがあっても怒ってはいけない、と、父親に教えられた】、なんだぜ！ …まいったよ、本当に！ あいつは、父親の言い付けを未だに守っているんだ！」

Kという男は、よく喋った。青年は、穏やかな表情で、耳を傾けていた。



(イメージ画像 Teruhisa Kitahara, Yukio Shimizu, 1000 Tin Toys [Paperback] から引用)

「工場のある山奥で、秘密の花畠を見つけた。恐らく、自然に咲いた花だけど、まるで誰かの手で育てられたかのように、辺り一面が花で敷き詰められていた。二人でびっくりしたよ！友達はそこを、【ロータス・イーターが住む国のようだ】って言ったな…」

「Lotus-eater、梶井基次郎が蒼穹という小説で書いた件ですね」

「…お前も文学好き、だなあ。あと、何だっけな…、ロータス・イーターの国は、【エノク書の天使の国】にも似ているし、【バルド・ソドル】にも似ている、と友達は言った。色々な例え話を、あいつはしてくれた。だから俺は、こう返してやったよ。【美しいなら、能書きは、どーでもいいじゃねーか！】ってな！」

…青年の穏やかな顔は、いつの間にか、真剣になっていた。

Kは、話を続けていった。

「その時に、花が、笑ったんだ。花には表情がないはずだけど、笑ったように見えたんだ。」

そして、俺と、友達は、二人で顔を見合させて…【試してみよう！】、と叫んだのさ！」

「試してみる…」

「そう。理由なんて、簡単なものさ。無差別にナイフを振り回すんじゃなくて、ここにある花を摘んで、無差別に、みんなにプレゼントしたら…どうなるのか？、と思っただけさ！」



(イメージ画像 [Teruhisa Kitahara, Yukio Shimizu, 1000 Tin Toys \[Paperback\]](#) から引用)

いつの間にか時が経ち、午前中の日差しが、心なしか強くなっていた。

天高く、突き抜けるような秋の空。

道を行き交う車の走行音が空に吸い込まれて、街に、独特な静寂が漂っている。

「…だけど、誰も、受け取らなかった…」

Kの話は終わっていなかった。

「俺は、こう思った。この街は、アニメやゲームやパソコン等の【物】を欲しがる奴で溢れている。オタクと呼ばれる奴らは、今がつまらないから、退屈しのぎで刺激的な物を求める。花は、ありきたりだ。刺激が弱くて平凡なら、ここでは誰も欲しがらない。…それでも友達は、こう言ったよ。【誰にでも、同じ、綺麗な心が残っている】…もう、何も言い返せない。口答えしても、しょうがない。元々、ひねくれる必要は、ないし、な！」

青年は、持参した水筒の蓋を開けて、カップにミネラルウォーターを注いだ。

それを、Kに手渡す。

Kは、おっ、済まないな、という表情でカップを受け取り、美味しそうに綺麗な水を飲んだ。  
…ふう、と、一息をつく。



(イメージ画像 スー・ピアソン, teddy bear book から引用)

「三月十一日」

Kは言った。

「あの日から、花は、受け取ってもらえるようになった」

青年は、黙って聞いている。

「多くの人が、東北で亡くなった。この街の事件以上に、大変な出来事が、あの日に起きた。

この街も変わったよ。自粛、と言われて、派手なネオンや街頭宣伝の音が、消えた。計画停電、と言われて、電気が自由に使えなくなったり。慌てる者が現れた。米や牛乳を買い占める者も現れた。そして、今までとは違う人も現れた」

青年は、まだ、黙っている。彼の話が終わるのを待っている。

「ある日、一人の女性が、花を受け取ってくれた。背が高くて、整った顔立ちで、凛とした印象の女性だった。彼女は一言だけ、【祈らせてください】と言って、花を手に取ってくれたんだ…」



(イメージ画像 Teruhisa Kitahara, Yukio Shimizu, 1000 Tin Toys [Paperback] から引用)

…Kの話は終わった。

おもむろに彼は立ち上がり、「さて、と…」と呟きながら背伸びをした。

「今日も配らないとな！」

Kは、自分のトラックに歩み寄り、荷台を覆うフードをほどきはじめた。

…中に、花が敷き詰められている。

「一人で配るのですか？」

青年は尋ねる。

「先程、お話をされていた友達の方は、一緒ではないですか？」

「あいつは今、東北に行っている」

てきぱきと準備をしながら、Kは答える。

「帰ってくるまでの間、俺は留守番だ。でもな、今日は一人じゃない…」

「えっ？」

「…お前がいるじゃないか！」

Kは、青年を真っ直ぐに見つめた。

そして、男らしい、たくましい笑顔で、青年に語りかけた。

「さあて、一緒に配ろうぜ！　俺の花と、お前の野菜がセットなら、みんな、受け取ってくれるさ！　福島県をカタカナで呼ばせはしない！　みんな、綺麗な心が残っているからな！」

「…はい！」

青年も、たくましく成長した笑顔で答えた。

秋の空は高く、その頂上には、太陽が明るく輝いていた。

(…第四話へ続く…)

## 熊の童話・第四話～「雨ニモマケズ」篇

青年は、帰路に就いていた。

世知辛い街を離れて、全景を見渡せる山の中腹まで、青年のトラックは移動していた。

荷台は空っぽ、だ。商品の野菜を完売したのだ。

青年は上機嫌だった。

野菜を受け取ってくれた人達の笑顔を思い出して、同じように、青年も頬をほころばせた。

「このことを、子供達に話してあげよう。そうすれば、みんな、安らかに眠ってくれるだろう」

青年は、そう思った。



(イメージ画像 東日本大震災 宮城（写真 岩井玲文）から引用)

整備が行き届いた車道を外れて、道路脇の張り出しへトラックを停める。

張り出しの下は切り立った崖で、視界が開けていた。

遠景に、首都圏の全域が広がっている。

高層ビルの一群は、どんなに遠く離れていても、はっきりと確認することが出来た。

日が沈みかけている。

オレンジ色の空を背景に、街のシルエットが漆黒のコントラストを描いていた。

「あの闇の中に、野菜を受け取った、綺麗な心の人達が住んでいる。それでも、あの闇を形づくる、汚い心の人間も、沢山いるのだろう」

街を見つめながら、青年は物思いに耽る。

いつの間にか、憂いの表情を浮べていた。

「例えば、公園のベンチ。雨風で汚れた椅子には、名も無き人達の匂いが染み込んでいる。それを感じるだけでも、涙は溢れる。そして、彼女と一緒に暮らした、あの部屋も。…別れ何年も経つけど、あのアパートは、今では取り壊されたと聞いている。終わってしまった、という喪失感だけが、僕の中に残っている…」

心地よい秋風が、青年の頬を撫でる。

青年は、ハツとした表情になる。まるで、何かに気づいたかのように。

「…そうなんだ。僕は、あの街に住んでいた。彼女と一緒に、あの部屋で暮らしていた…」

彼の憂いは、色濃くなつてゆく。

「そして僕は、あの街で仕事をしていた。僕の上司は、ことあるごとに、僕を叱り付けた。仕舞いには、殺すぞ、と、汚い言葉を吐いた。面と向かってならまだしも、時には留守番電話のメッセージに、そして、メールの文面にも吐き続けた。…僕は我慢した。だって、【どんなことがあっても、怒ってはいけない】と、父親に教わっていたから…」

夕焼け空に、一筋の流れ星が落ちる。

「…ちょっと待って。…怒ってはいけない…、この言葉、あの街で聞いたばかりだ。ひょっとしたら僕は、記憶を…」



(イメージ画像 東日本大震災—写真家 17人の視点（写真 平間至）から引用)

日は更に沈み、街は、闇の領域を広げてゆく。

闇の中に、ポツンポツンと光が瞬く。

それは、ネオンか、ヘッドライトかもしれない。

青年の言う、綺麗な心の象徴、かもしれない。

それでも闇は無くならず、そこに存在している。

青年は、その中へ堕ちてゆく…。

「…殺したい、と、怒りを顕にする人がいる。死にたい、と、嘆く人がいる。泣いている人がいる。どうしたらしいのか判らずに、引き裂かれそうな人がいる。…半年前に、東北で、大変な出来事が起きた。あの街の人達は、そのことを、どう思っているのだろうか…。生き馬の目を抜くような残酷な世界では、自分の身を守ることに必死で、相手を気遣う余裕もない。それでも、もし、あの街に…半年前と同じ出来事が、起きたとしたら…」

『…緊急地震速報です。東京湾北部で地震。次の地域は、強い揺れに警戒してください。東京都…』



(イメージ画像 東日本大震災—写真家 17人の視点（写真 岡田敦）から引用)

カラーラジオから、聞き覚えのあるチャイムが流れた。

瞬時に、青年は身を固くする。

半年前の記憶が甦る。

改めて、遠景の街を凝視する。

オレンジ色の空と闇のシルエットに変化はない。

否…何かが来る！

鳥が、大量に、車道の反対側にある山肌から羽ばたいていった。

…ガクンッ！

大地が、突然、下がった！

青年は身を伏せる！

そして…ゴゴゴゴゴと、音を立てながら、大地が、波のように動きはじめた。

山肌は震えて、石礫が微塵に落ちる。

…ビシッ！ 青年のいる張り出し部分に、亀裂が走った。

間髪を入れずに青年はトラックに飛び乗り、エンジンを駆ける。

急発進！ トラックが車道へ入った瞬間、張り出しへ崩れて、全て落下していった。

トラックは、ひた走る！

車道は波打ち、アスファルトの一部分は陥没して、側面の山肌から落石が相次ぐ。

ギリギリの状況で、意識を集中して、青年は走り続けた！

カララジオから、アナウンサーの悲鳴が聞こえてくる。

…視界に、山間に挟まれた河川と、そこを横断する鉄橋が見えてくる。

「広い場所へ！」

咄嗟の判断で、青年はハンドルを切る！

アクセルを踏み込む！

トラックは唸りながら加速して鉄橋を突っ走った！

…中間部の橋桁を通過した直後に、異変が起きる。

長周期の縦揺れで接合部に歪みが生じて、橋桁がブロックごと…崩落する！

間一髪、 トラックは橋を渡りきった。その併、側道を曲がり、河原の広場へ停車する。

…周辺に、水面へ激突した橋桁の衝撃音が響いていった。

その音は山の空気に溶けてゆき、同調するように、本震が収まってゆく…。



(イメージ画像 東日本大震災 宮城（写真 岩井玲文）から引用)

…カーラジオのチューニングを再設定をしても、何も聞こえてこない…。

青年は、一刻も早く、地震の被害状況を知りたかったのだが、どの周波数に合わせても無音で、有益情報を得ることはなかった。

…鼓動だけが、高鳴ってゆく…。

『放送局は麻痺している』

聞き覚えのある声が、青年に話しかけた。

それは、人間の声ではない。

「…熊さん、どうして、ここに…」

夏の季節に、イーハートーボの山で共に暮らした熊が、四肢を踏みしめながら、青年の元へ近付いていった。

そして熊は、物珍しそうに、青年が触っている機械を眺めた。

『それは、ラジオ、と言う物だろう？ 人間が、遠く離れていても、お互いの声を聞く為に作られた道具だ。勿論、動物だって、遠い場所で鳴いている仲間の声を聞くことが出来る。自分の耳を使ってな。人間は、道具を使わないと、何も出来ない』

…熊の放った言葉は、青年の耳には入らない。

不安と疑問が膨れ上がって、頭の中が一杯になつていった。

…その、思いの丈が爆発する！

「信じられない！ ここはイーハートーボから 100km 以上も離れている！ 普通の動物が歩いて、ここまで来れる訳がない！」

興奮する青年に向かって、熊は穏やかに返答した。

『俺は、普通の熊ではない』

…沈黙が、青年と熊との間に流れていった。

日は完全に沈み、空は漆黒の闇に覆われている…。

『もう一度、言おう。人間は本当に、道具を使わないと、遠くの声が聞こえないのか？ 俺も、あんたも、同じ生き物だろう？ …耳を澄ませてみろ！』

熊の言葉に、青年はまた、ハッとした表情になる。そして、反射的に踵を返して、夜空をキッと見上げて、ある一点を凝視した。

その一点だけが、赤く、鮮やかに闇を染めていった。

それは、炎、だ。

遠く離れたあの街が、東京が、…燃えている…。

(モーメントマグニチュード<sup>9</sup>の、想定外の、プレート境界型地震)

(長周期の縦揺れが免震構造を覆し、高層ビルが倒壊)

(首都高速道路と鉄道の高架も倒壊)

(都内に集中した放送局は機能不能に。インターネット設備も同様)

(行方不明者は…数えきれない。唯一の生存者の声が、聴こえてくる…)

『…助けてくれ！』



(イメージ画像 東日本大震災—写真家 17 人の視点（写真 太田庚介）から引用)

『…どうするんだ？ あんたは、あの街から来たのだろう？ …それとも、また、俺と一緒に、山へ戻るのか？』

熊は、赤く染まった空を見つめ続ける青年に問いかけた。

青年は…すぐには答えられない。

空を見上げた作で、両手の拳を握り締めた作で、固まった姿勢を解くことが出来ない。

…ようやく、少しずつ言葉を選びながら、答えはじめた。

「熊さん。僕は、あなたに、子供達の面倒を頼まれました。津波で亡くなった子供達は、魂だけになっても、あの山へ舞い戻り、想いを込めて野菜を作り続けました。僕は、収穫した野菜を、売りに行こうと思いました。生きている人間を代表して、僕と同じ、生きた人間の仲間に、子供達の想いを届けたかったのです。嬉しいことに、あの街の人達は、野菜を全て、受け取ってくれました。僕は、このことを、子供達に伝えたい…」

『そうか。それでいいんだな？』

熊は、青年の答えに、素直に反応した。

しかし、青年の答えは…まだ、続いている。

「…でもね、熊さん。確かに僕は、あの街から來ました。…今まで、それを忘れていたのです。嫌なことがあったから、忘れようとしていたのでしょうか。…それでも、あの街には、僕の恋人だった女性が住んでいます。いつも怒っていた、僕の職場の上司がいます。上司は僕に、死ね、と言ったけど、ひょっとしたら、彼は今、怪我をして苦しんでいるかもしれません。僕は、彼が嫌いでした。それでも、彼が、本当に、死にそうになっているのなら、僕は…黙って見てていられるのでしょうか…」

『能書きは、どーでもいいじゃねーか！』

熊の言葉に青年は、ハッと、目を見開いた！

何度も、何度も、彼は、その声で目覚めていった！

「…熊さん、あなたは、あの街で、花を…」

『理由なんて簡単さ！　さあ、あんたが思う通りのことをやるんだ！』

熊は青年を真っ直ぐに見つめて、野生の笑顔で励ました！

「はい！」

青年も、自分探しを終えたような、パーフェクトな笑顔で答えた！

そして、青年はトラックに飛び乗り、エンジンを駆ける！

…余震が襲ってきた。

「大丈夫！ 負けはしない！」

…躊躇せずに、トラックは発進する！

目的地は…【東京】！



(イメージ画像 東日本大震災—写真家 17人の視点 (写真 立木義浩) から引用)

(…第五話へ続く。物語はいよいよ後半戦に…)

## 熊の童話・第五話～「だけど、僕らは今、ここにいる」篇



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

「マサユキ、起きな～っ！」

うら若き女性の喚声で、マサユキと呼ばれた青年は目を覚ました。

…目覚めた瞬間に、全てを理解した。

今までに起きた出来事は、夢、だ。

イーハトーボの山も、透き通る子供も、花を売る男も、首都圏直下地震も、そして、熊も、  
青年の頭の中で描かれた夢、だったのだ。

…現実世界の青年は、ベッドに横たわる自らの肉体を、その感触を…確かめてみる。

そして、眠っていた自分自身を起こしてくれた女性へ…声をかけてみた。

「…ミサ、…無事だったのか…」

「また、寝ぼけてんの？ あなたって、夢の見過ぎ！」

ミサと呼ばれた女性は、軽く青年を小突くと、ベッドから離れて、部屋の窓際へ歩み寄る。

カーテンを開ける。

爽やかな朝の光が差し込み、不安に染まっていた部屋の色は…一瞬で変わった。

「せっかくの日曜日よ。マサユキは、夢もそうだけど、仕事も頑張り過ぎなんだから、今日くらいは、ゆっくりしないとね」

ミサという女性は、青年を、もう一度、マサユキと呼び、そして、微笑んだ。

…彼女の微笑みの上に、別の少女の笑顔が重なってゆく。

頬に泥んこを付けた少女、ネリの笑顔に変わってゆく。

隣にはペムペル少年が、黄金色のトマトを手に持て、佇んでいる。

…マサユキと呼ばれた青年は頭を振って、幻影を拭い去った。

「ううなんだ…僕は、目覚めなければいけない…。起きるよ！」

マサユキは飛び起きた！

掛けていたタオルケットを跳ね飛ばして、フローリングの床を踏んで立ち上がったのだが、

…長く眠り過ぎていたのか、立ちくらみがして…がくん、と崩れた。

ミサは駆け寄って、マサユキを支えた。

「ちょっとお、大丈夫？ 仕事の疲れが溜まっているのね」

ミサは、マサユキを肩に預けた後、そう言った。

「…ゴメンな、ミサ。…どうしたんだろう、僕は…」

マサユキは、ミサに寄りかかった状態で話を続ける。

「本当に…どうしたらしいのか、いつも考えてるよ。あれから…ハヶ月も経つのに…」

ミサは、んもう、という表情になり、ちょっとだけ苦笑いの顔を作る。

「わたし、暫くしたら東北へボランティアに行くね。マサユキも一緒に行ければいいけど…」

「そうだね…。でも、僕には仕事が…」

突然、ベッドサイドに置いた携帯電話が鳴り出した。

マサユキは思いっきり、顔をしかめた。

「噂をすれば、会社から呼び出し、だ…」



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

【六本木】という街の中心に、高層ビルが仁王立ちしている。

円柱状の、独特の形態をしていて、SF 映画に登場しても違和感ない個性があった。

この建物の中に、マサユキ青年が勤める会社（オフィス）があった。

「スタッフが、また、飛んだそうだな」

マサユキの上司は、椅子に深く座り、デスクに足を投げ出した状態で、そう告げた。

休日出勤なので、オフィスには殆んど人がいない。上司とマサユキの二人だけだ。

上司は派手な私服姿で、リラックスしていた。

髪をグリースで撫でて、シルバーのアクセサリーを身に付けていた。

彼のPCは、こっそりと動画再生ソフトを立ち上げていて、ロックミュージックを流している。

その隣で、襟を正したオフィスカジュアルの服装で、マサユキは立っていた。

「震災以降、サプライヤーの部品供給不足や、輪番操業の影響で、製造業は落ち込んでいる。うちには人材会社だ。顧客に人材を送るのが商売だ。客に頭を下げて、やっと届けた商品なのに、勝手に飛んで、行方不明になれば、客は怒るし、うちの信用も無くなる。…どの様に責任を取るんだ？」

上司は、ロックの動画を眺めながら説教をした。部下に視線を向けなかった。

「飛ぶ、という言葉は使わないでください」

マサユキは答えた。上司は驚いた顔に変わり、部下へ視線を移した。

「どうしたんだ？ 大人しい君が逆らうなんて…珍しいじゃないか」

上司はニヤニヤ笑いになりながら、話を続けた。

「根拠の無い反論をするな。殺すぞ」

「殺す、も、止めてください。八ヶ月前、東北で、多くの命が失われたのを…覚えているのですか？ 言葉は正しく使ってください！」

マサユキは、毅然として答えた。

上司は、顔を醜く引き吊らせた。

「…わ、判っている！ ふざけているのではない、ユーモアだよ…」

マサユキは上司を睨んだが、何も答えない。

上司は姿勢を正して座り直して、作り笑いで部下に媚びはじめた。

「この会社は、自由な社風なんだよ。学歴に関係なく、実力で成り上がるんだ。休日出勤でヘヴィメタルを聴いても、罰は当たらないだろう。…震災以降、自粛とかで皆、固くなり過ぎている。悪魔を讃える歌ぐらい、洒落で聴くべきだ！」

上司は、動画ソフトのボリュームを上げた。

大音量で、英語の歌詞が流れる。



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

Burning lives burning, Asking me for the mercy of god.

Ancient cries crying, Acting fast upon the way of the dog.

Welcome to Hell, Welcome to Hell.

マサユキはまた、思いっきり、顔をしかめた。

両手の拳を強く、握り締めた。

【どんなことがあっても、怒ってはいけない】

父親の言葉が、マサユキの内に湧き上がる。

「…スタッフは、私が探して説得します。今日はこれで失礼致します」

マサユキは一礼をして、ヘヴィメタルが流れるオフィスを後にした。



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

【六本木】という街は、目が眩む程に多くの、自動車と人間が行き交っている。

啖呵を切ってオフィスから飛び出たマサユキだが、何故だか、後味が悪かった。

行方不明になったスタッフの連絡先は知っているが、すぐに声をかける気になれない。

『俺達は所謂、ワーキングプアだ。訳ありで、こうなってしまった』

…この言葉は、あの時、夢の中で花を売った男、【K】の言葉だ。

『この街は変わった。花を、受け取ってくれるようになった』

…目を閉じれば、夢の中の言葉を、はっきりと思い出すことが出来る。

「でもね、Kさん。この街は、本当に…変わったのでしょうか…」

マサユキは独りごちて、見えない誰かに問いかけてみる。

「変わったよ」

返事が聞こえた。

それは、夢の中の言葉ではない。

現実の世界で、誰かが、マサユキの背後から声を掛けたのだ。

マサユキは振り向く。

ミサが立っていた。

茶色の帽子とコートの、彼女得意のスナフキン・ファッショングで、ちょこん、と立っていた。

タンポポのように、微笑んでいた。

「迎えに来たよ。たまには変わったこと、するのもいいでしょ。一人で帰ると寂しいもんね」

マサユキの不安は、ミサに溶かされていった。

「あー！ 泣いちゃダメ！ いちいち感動しない！ 外で涙目してると、みっともないよ」

ミサは鋭く突っ込む。マサユキは照れ隠しをする。

「…よーし！ ミサ、久しぶりに外で御飯でも食べるか！」

「うちで食べようよ。買い物もしてあるし。今は贅沢はダメだよ」

「…そーだな。だったら、帰る前に…ちょっと寄り道しよう！」

「えっ？ それって、デート？」

そして二人は一緒に、小ぢんまりとした坂道を下った。



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

周りには、買い物帰りの主婦や、外食目当ての親子連れが目立つ。

六本木という土地柄か、皆、どことなくセレブだ。

よく見ると、高そうなカフェやレストランが道沿いに並んでいる。

道幅が細くて、建物も密集している為、例の高層ビルが視野に入らない。

マサユキは、この坂道が好きだった。

「この先を真っ直ぐ行くと、確か、テディベアのお店があったよね？」

マサユキは明るい声で、ミサに話しかけた。

「そーだ！ マサユキって、ぬいぐるみ、好きだったよね！ 今度、くまちゃんのぬいぐるみを作つてあげる！」

ミサは元気に答えた。

そして二人は歩きながら、会話を紡いでいった。

「確か、テディベアのお店に、材料が売つてたよね。モヘアとか…」

「何それ？」

「がくっ…。テディベア作るんなら、勉強しなきゃ！ モヘアはアンゴラヤギの毛皮だよ。大抵のテディベアは、その毛皮で作られてるんだ。有名なのは、ドイツの【シュタイフ】というメーカーのテディベア。今から百年前に創業されて、当時は色々な動物の縫いぐるみを作つてたけど、何故か、【熊】の縫いぐるみが大ヒットしたんだ」

「うんうん、それで？」

「【熊は、かつては、王、であった】 …とある哲学者は、そう言つてゐる。熊には神秘的な力が宿つてゐるんだ。アイヌ、エスキモー、アメリカ・インディアンと言われる人達は、陸上に棲む最強の動物である熊を、自然の脅威の象徴、自然の力が集約された存在と見なした。人間は、ひ弱な存在だったけど、英知を養い、遂には熊を殺す武器を作つてしまう。それでも太古の人間は、謙虚に、身の丈をわきまえていた。人間は、むやみに熊を殺すことはしなかったし、やむを得ず食料として捕らえる場合は、儀式を行い、丁重に扱つた。【イオマンテ】という言葉を聞いたことない？ それが、その儀式の名称だよ。人間は、死を、大切に扱う生き物、だったんだ」

「…すごーい！ マサユキ、話したら止まらないよね！ 子供が出来たら、良いお父さ

んになれるよ。子供は、物語が大好きだし！」

「…ねえ、それって、ミサから僕に、プロポーズしてない？」

「バカねえ、女の子にそんなこと、言わせないの！　待ってるからね☆ …それよりも、テディベアのお店って、この辺じゃあ…」



(イメージ画像 ジャパンテディベアファンクラブ会報32号 から引用)

二人は歩みを止めた。

…シャッターが閉まっている。

その場所に、知る人ぞ知る、テディベアの雑貨店が営まれていたのだが、いつの間にか…閉店していたのだ。

…そして、二人は気づく。

シャッターの前に、花が、慎ましく供えられているのを…。

「…ねえ。お花があるってことは、ひょっとしたら…」

「…うん。店長さんは高齢の御方だったよね。暫く、伺わない間に、他界されたのかも…」

先程まで、はしゃいでいた二人は急に黙り込み、閉ざされたシャッター前で佇んでいた。

「…ミサ、駄目だよ。この場所で泣くのは、いけないよ…」

「…変わっていくんだね。人の命も、思い出も、時が経てば、変わっていってしまう…」

マサユキは、隣に立つミサの手に触れて、そして、強く握った。

ミサも、強く握り返す。

二人は手を繋いだまま、時が許す限り、この場所に佇もうとした。

「…あっ」

マサユキは気づく。

シャッターの横にある路地に、勝手口と思われる小さなドアがある。

それは、半開きになっていた。

マサユキは、隙間から漂う闇を、凝視する。

…鼓動が高鳴ってゆく…。

「どーしたの？」

問いかけるミサへの返事をせずに、彼女の手を握ったまま、マサユキは、もう片方の手でドアノブを掴み、勢いよく開放した。

そのまゝ、躊躇せずに侵入する。

「ダメだよ！ 勝手に入っちゃ！」

ミサは叫ぶが、マサユキに引っ張られて、為す術もなく、吸い込まれてゆく。



(イメージ画像 Georges de La Tour, Nativity of Crist から引用)

灯りは消えていた。

闇の中で、マサユキとミサは、離れ離れにならないように手を繋ぎあい、じっとしている。

…すると、判ってくる。

今、そこに、何が居るのか、が…。

一匹のテディベアが、忘れ物のように、お留守番のように、がらん、とした部屋の中で一つだけある椅子に、座っていた。

闇の中で、テディベアのガラスの瞳が、淡く光る。

マサユキは、その光を見逃さなかった。

そして、その小さな黒い塊は、がさっ、と音を立てて、動きはじめた。

それは、鼻面を、マサユキ青年の方向に向けた。

青年は穏やかな表情になり、静かに語りかける。

「熊さん、久しぶりだね」

『やっと会えたな。あんたの頭の中から、出てきてやったぞ』

テディベアは野太い声で答えた。

青年の彼女は、彼と、縫いぐるみとを、交互に見比べた。

困った表情の何んで。

(…第六話へ続く…)

## 熊の童話・第六話～「がんばってみるよ、やれるだけ」篇

「はい、くまちゃん！」

ミサは、ダイニング・テーブルに、でん、と座った熊の縫いぐるみにマグカップを渡した。

その中には、ほかほかのミルクティーが入っている。

縫いぐるみはガラスの瞳で、ギロリ、とマグカップを睨むと、可愛い手で、むんず、と掴み、

それを ω 状の口に持っていった。

ゴクッ、ボコッ、ギョフッ…。

物凄い音を立てて、一気に飲み干す。

『ぶはあ！ 五臓六腑に滲みるわい！』

「…やつだあ、ぬいぐるみなのに、全然、かわいくない…」

ミサは溜め息を吐きながら椅子に座り、テーブルに頬杖を突いた。

マサユキもテーブルを囲みながら、そんな二人を穏やかに眺めていた。

あの夜、マサユキとミサは、六本木にある雑貨店で、一匹のteddy bearと出会った。

そのteddy bearは、自らの意思で動き、言葉を喋った。

それは、マサユキが夢の中で出会った、熊、だった。

その不思議な熊が、teddy bearの中身に入っている感覚がした。

マサユキとミサは、躊躇せずにteddy bearを、二人が一緒に暮らす部屋へと連れていった。



(イメージ画像 スティーブン・スピルバーグ/A.I. から引用)

「ねえ、くまちゃんの声って渋いよね。【スピルバーグのA.I.】に出たテディベアみたい」  
ミサは、熊の縫いぐるみを、ちょん、と突いた。

縫いぐるみは、がるる…、と唸る。

「それって、マニアックな映画の喻え、だよね」

マサユキは嬉しそうに、ミサに話しかける。

「あなたが『見せたんじゃない！ 映画才タクなんだから～』

ちょっと頬を膨らませるミサ。

『映画とは何だ？』

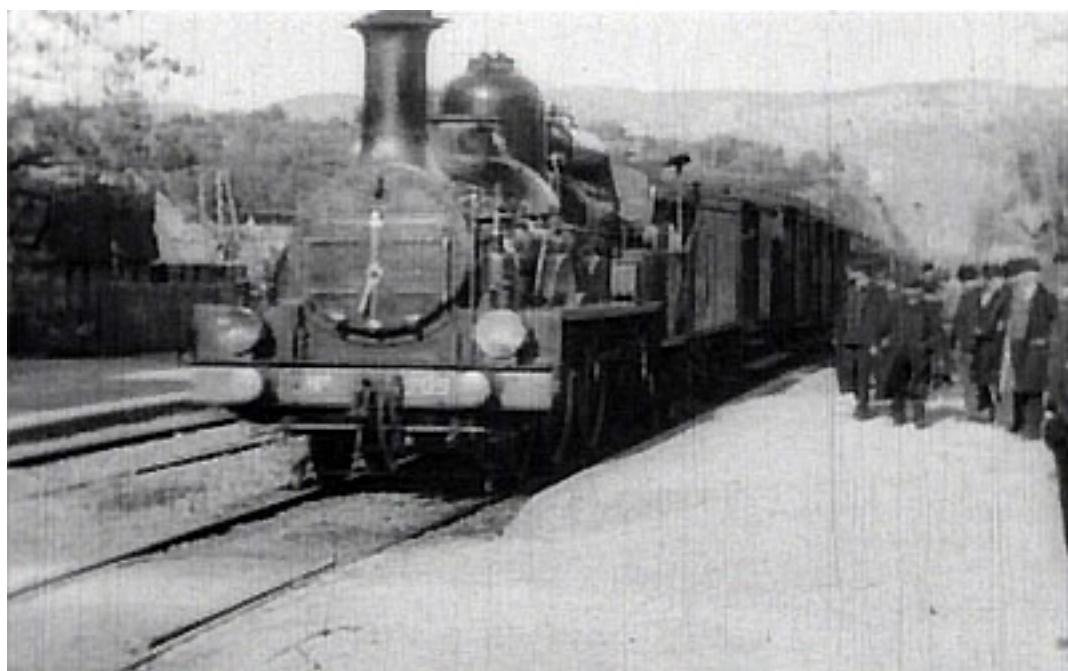
縫いぐるみはマサユキの方向へ振り向き、問いかける。

マサユキはまた、嬉しそうな顔をして、子供が親に学校で起こったことを報告する感じで、  
答えはじめた。

「そうか、熊さんはずっと山の中で暮らしてきたから、映画やテレビを見たことがありませんよね。…そうだなあ、例えるなら、【夢】みたいなものかな？」

『夢、なのか？ 動物は夢を見ると思うか？』

「えっ？ そうではなくて、例えばあの時、僕が体験した出来事に近い感覚、と言うべきかな。…透き通った身体の子供達や、野菜畠で見た幻視のような、現実世界を揺さぶる出来事、人間の想像力を刺激する要素を【映像という情報】に収めたのが映画、なんです」



(イメージ画像→引用元)

「今から 100 年以上も前に、【リュミエール兄弟】という人達が、蒸気機関車が駅に到着する映画を撮りました。それ以前に、世界には映画と呼ばれるものは存在しません。【ラ・シオタ駅への列車の到着】と題されたその映画は、狭い室内で上映されたのですが、本物の汽車と勘違いして、轢かれないように逃げようとした観客が現れました。それぐらいに、映画の誕生は衝撃的だったのです」

「ラジオでも、火星人が来た！ と放送したら、大騒ぎになったよね」  
ミサが、マサユキの解説に割り込んできた。

マサユキは、弾んだ声でミサへ返答する。

「そうだね、【オーソン・ウェルズの火星人襲来】だよね。まだテレビが普及してなかった頃、ラジオが唯一の情報源だったアメリカ合衆国で、アナウンサーが事件を実況中継する手法でドラマを放送したら、本当にパニックが起きてしまった」

今まで黙って耳を傾けていた縫いぐるみが、口を開く。

『ならば、俺も、あんたの想像力から生まれた情報という存在で、現実には存在しないことになるのだな？ …もし、俺の存在を人間が理解することが出来なかったら、人間はパニックを起こすのか？』

「でも、わたしはくまちゃんとお喋りしてるよ。だいじょうぶ、くまちゃんは怖くないから！」  
ミサは、縫いぐるみに向って微笑んだ。縫いぐるみは、小さな頭部を彼女の方へ向ける。

『お嬢さんは動じないんだな』

「やった～、お嬢さん、だなんて☆ くまちゃんって、褒めるのがうまいね♪ お礼にケーキをあげよう！」

ミサは、ぴょん、と立ち上がって、ハミングしながらキッチンへ向かう。

縫いぐるみとマサユキは、きょとん、としながら、彼女を見送った。

『…俺、間違ったことを言ったか？』

「いや、大丈夫ですよ、熊さん。彼女は元々、あんな感じなんです。だからいつも、助かっ

ていますよ。僕は、考え過ぎるから…』

『あんたも自分自身を理解するようになった。成長したぞ。あんたとあの子、お似合いの番い（つがい）、だ』

「つがい、って…凄い言葉ですね」

マサユキと熊の縫いぐるみは何気なく目を併せて、一緒に微笑んだ。



（イメージ画像 [ジョゼフ・キャンベル／神話のイメージ](#) から引用）

『夢と言えば、あんた達が【神】と呼ぶ者で、常に眠り続けている者がいる。【ヴィシュヌ】と呼ばれているが、そいつは、そいつ自身が見る夢の中で人間を操っている。そいつの夢が、あんた達の言う【現実】なんだ』

熊の縫いぐるみは、ミサがくれたケーキを頬張りながら、語りはじめた。

「維持のヴィシヌ、ですね。創造のブラフマー、破壊のシヴァ、ヒンドゥー教の三大神ですね」

マサユキはブラックコーヒーを飲みながら、返答する。

縫いぐるみは、毛についた生クリームを取りながら、話を続けた。

『そしてヴィシヌは、自分の夢の中にも、自分自身の姿で現れる。あんた達の映画で言えば、ヴィシヌは【監督】であり【役者】でもある。ある日、世界は大きな波に襲われて、大地は水没した。世界を操る夢を見るヴィシヌは、夢が意外な展開をしたので、修正しようと、もう一人のヴィシヌを夢の中へと送る。そいつは巨大な猪に変身して海に潜り、沈んだ大地に牙を突き刺し、力強く押し上げて、海上へとせり上げる。そして、世界は復活した』

マサユキは真剣な顔で、縫いぐるみを見つめている。

ミサは、縫いぐるみに与えたのと同じケーキを突きながら、口を挟んだ。

「それって、【キアヌ・リーブスが出たマトリックス】に似てるね」



(イメージ画像 ラリー・ウォシャウスキー&アンディ・ウォシャウスキー/マトリックス から引用)

『マトリックスとは?』

「ピストルの弾を避けるの！ 普通は撃たれたら死ぬけど、キアヌは避けるんだよ！」

熊の縫いぐるみは最初、発言主のミサに問いかけたが、…漣々とマサユキの方へ視線を移した。

「【ウォシャウスキー兄弟】という人達が監督した SF 映画です。…熊さんに説明するのが難しいかもしれません、簡単に言えば、熊さんが仰った【ヴィシュヌ】に近い役割をする機械、【人工知能】が、映画の中に現れます。人工知能は、【仮想空間】という、電気信号で計算された情報を眠っている人間の脳神経に送り込み、あたかも夢を見ている感覚で、その人間を仮想空間の中へ誘います。そんな約束事が、映画の中に設定されています。キアヌ・リーブスは、その映画に出演する役者です。映画の中では、仮想空間で人間は、銃という武器から放たれた弾丸を避けることが出来ない設定になっています。現実に於いても、銃は、人間やその他の生物を殺傷する武器であり、弾丸は音速という物凄い速度で移動するので、避けられる生物は絶対に存在しません。…それでもキアヌ・リーブスは、映画の中で、弾丸を避けるのです」

『何故だ？』

熊の縫いぐるみは問いかけた。人間の青年は答える。

「彼の脳神経が、人工知能が送り込んだ情報を超えた計算をしたからです。熊さんのヴィシュヌに例えると、ヴィシュヌの夢の中に現れた人間が、何らかの方法で、ヴィシュヌの内部に侵入して、夢を見る方法に【干渉】したのです」

『ガハハハハッ！』

突然、縫いぐるみは笑った。哄笑と呼べる笑い方、だった。

マサユキとミサは、びくっ、と、身を震わせた。

『人間は色々と考えるんだな！ 正に、大脳皮質の内部に派生した流動的知性の成果、とも言える！』

縫いぐるみの独白に、二人の人間は啞然としている。

…気を取り直したかのように縫いぐるみはかしこまり、縫いぐるみらしい滑稽な仕草で、マサユキに向かって話しかけた。

『他に何か、面白い映画はないのか？』

「…あっ、だったら DVD で、実際の映像を見てもらいましょう」

マサユキは立ち上がり、壁際に置いてある薄型テレビへ歩み寄り、周辺に散らばっている DVD ケースから何作品かを選び、その一枚を DVD プレイヤーにセットした。



(イメージ画像 スタンリー・キューブリック／2001年 宇宙の旅 から引用)

「2001年、だね」

液晶モニターに表示された映像を見て、ミサは言った。

マサユキは説明をはじめる。

「【2001年 宇宙の旅】、【スタンリー・クーブリック】監督が1960年代に撮ったSF映画です。半世紀近く前の映画なのに、今の時代で見ても、古びた要素を感じない。それだけ、クーブリック監督の想像力には、圧倒的なメッセージ性が籠められているのです。内容は、簡単に説明すれば、人類が棲む惑星、地球から、宇宙へと旅立つ物語。実際に60年代は、アメリカ合衆国やソビエト連邦の宇宙開発事業が盛んだったので、当時の現実感覚の再現と、更に未来に向けての指針が、この映像に溢れています」

『それだけではないな』

熊の縫いぐみは、静かに答えた。

その声は、何処となく、映画に登場する人工知能の声質に似ていた。

マサユキはまた、びくっ、とする。

美しく青きドナウが流れるシーンで再生を止めて、次のディスクをセットした。



(イメージ画像 [リドリー・スコット／ブレードランナー](#) から引用)

「ブレードランナー、だ！　これは…かわいそうなお話、だったね…」

『可哀相？　人間が言うところの、悲劇、なのか？』

ミサと縫いぐるみの会話を割るように、マサユキは解説する。

「これは、【リドリー・スコット】監督が撮ったSF映画です。それまでは【2001年 宇宙の旅】の延長線上で、宇宙を舞台にしたSF映画が多かったのですが、この【ブレードランナー】から違うビジョンが生まれました。地球の未来の姿を描いてますが、明るい流線型的なものではなくて、真逆の暗いイメージ。【サイバーパンク】【デッドテック】という言葉が、この映画から生まれました。リドリー・スコット監督は【ピクトリアル・リファレッシング】【レイヤリング】という表現手法を用いて、自らの想像力を過剰に吐き出していったのです」

『この映画はダメだ』

縫いぐるみは、さらり、と答えた。マサユキは慌てて問い合わせる。

「どうして、ですか？ この映画には熱狂的なファンが多い。隠れた名作、なんですよ？」  
縫いぐるみは、オレンジ色に染まるピラミッド形状の高層ビルの映像を、ぼんやりと眺めながら、話を続けた。

『別に、こんな外観の建物でなくてもいいだろう。確かに夜が多いし、雨も降りっ放しで、良い気分はしない。それで人気があるのなら…人間は、おかしいぞ』

「暗い雰囲気は、たまには必要だと思う」

ミサは助け舟を出した。…だが、それは追い討ちへと変わってゆく。

「それでも、悲しくなり過ぎると…辛くなってしまう…。映画ではレプリカントって言われてるけど、わたしは何となく、差別や苛めに見えてしまう。見た目は同じだけど、貴方と私は違う、と、はっきり言われるのは、本当は…悲しいことなんだよ…。この気持ちが判らな

くて、派手な特撮に目がいくのなら…冷たいな…」

…マサユキは、美しいレイチェルがヴォイド=カンプ・テストを受けるシーンで止めて、次の準備をはじめる。



(イメージ画像 ラリー・ウォシャウスキー&アンディ・ウォシャウスキー/マトリックス から引用)

「また、マトリックス！ やっぱりキアヌ・リーブスって、マサユキに似てるねえ☆」

『お嬢さんは、あんたにぞっこん、だな。雌雄一体、良い繁殖を』

「まったく～☆ くまちゃん、その言い方って、なんか、やらしい♪」

マサユキは、明るくなった二人の言葉に頬をほころばせながら、解説をはじめた。

「えっと、先程も話しましたが、ウォシャウスキー兄弟のSF映画には【異化効果】があると思います。熊さんから指摘があったように、クーブリック監督の2001年…には、リアリスト的宇宙描写を超えた哲学劇がありました。そこには、熊さんのヴィジュヌ発言に近い【神性】が漂っています。ミサがブレードランナーで指摘したように、リドリー・スクット監督の映画には映像美の追求が見受けられるけど、人間の道徳面に関しては…無責任かもしれません。ウォシャウスキー兄弟のマトリックスは、一見して、リドリー・スクット系譜のドライな映像美ですが、実はゲーム感覚で【神性】の要素を組み込んでいます。【ユング

心理学】【ショーペンハウアーの自由意志】が、物語の中で軽快に流れるのです」

「マサユキ、難しくて、わかんないよー」

ミサは、ちょっとむくれる。マサユキは微笑みながら補足した。



(イメージ画像 [ラリー・ウォシャウスキー&アンディ・ウォシャウスキー／マトリックス](#) から引用)

「例えば、キアヌ・リーブスが演じる【ネオ】は、結果的に、仮想空間内で銃弾に撃たれて心音停止してしまいます。だけど、彼を愛する女性、キャリー＝アン・モスが演じる【トリニティ】がキスをすると、ネオの心音は復活します。そして、仮想空間の配列構造や制御法則を全て把握する存在に、文字通りに生まれ変わるので。トリニティは、【私が愛した人は死がない】と、強く信じていました。結果的に人間の意志が、雁字搦めに縛られた法則を解放する、きっかけ、となるのです。そんな【比喩】【メタファー】が、このシーンに籠められていました」

縫いぐるみは、口を挟む。

『メタファー、というのか。確かに比喩的な思考は、人間ならではのもの、だ。【食べたいくらいに可愛い】という言葉を聞いたことがある。…あんたも、俺に初めて会った時に【僕を食べてください】と言ったな。あの言葉もメタファー、だったのか?』

「マサユキ、またそんなこと、言ったの？ 自分で自分を傷つけること、言っちゃダメよ！」

ミサは、小鳥が甲高く囁るように、マサユキを叱った。

マサユキは、お灸を据えられた子供のように、肩をすくめる。

縫いぐるみだけが、我は関せずの姿勢で、話を続けた。

『しかし、あんたが見せてくれた映画は、エスエフ、というものが多い。エスエフ、とは?』



(イメージ画像 スタンリー・キューブリック／2001年 宇宙の旅 から引用)

「【Science Fiction】の略です。科学的な根拠に基づき、想像力を飛躍させて綴る架空の物語、という意味です。科学的思考と技術革新は、最も人間らしい一面を確かめる手段であると僕は思っています。前述の【2001年 宇宙の旅】で、猿と見分けがつかない人間の祖先は、大腿骨が武器になることを気づいた瞬間に、以前とは比べ物にならない【力】を得ました。この【気づきを求める姿勢】こそが、科学の発展へと繋がっているのです」

『そして人間は、科学の力に頼り過ぎて、頭でっかちになり、肥大した力を抑えきれずに、自分自身を見失ってゆく』

「…そうですね。特に震災以降は…人間は、ひ弱さに苛まれています…」

「でも、生きていかなきゃね」

三人は、お互いに見つめあった。

「ねー、SFばっかだから、違うのを見ようよ」



(イメージ画像 新海誠／秒速5センチメートル から引用)

「…じゃあ、食後のスイーツ代わりに」

「秒速5センチメートル！ マサユキにぴったりのアニメだね☆」

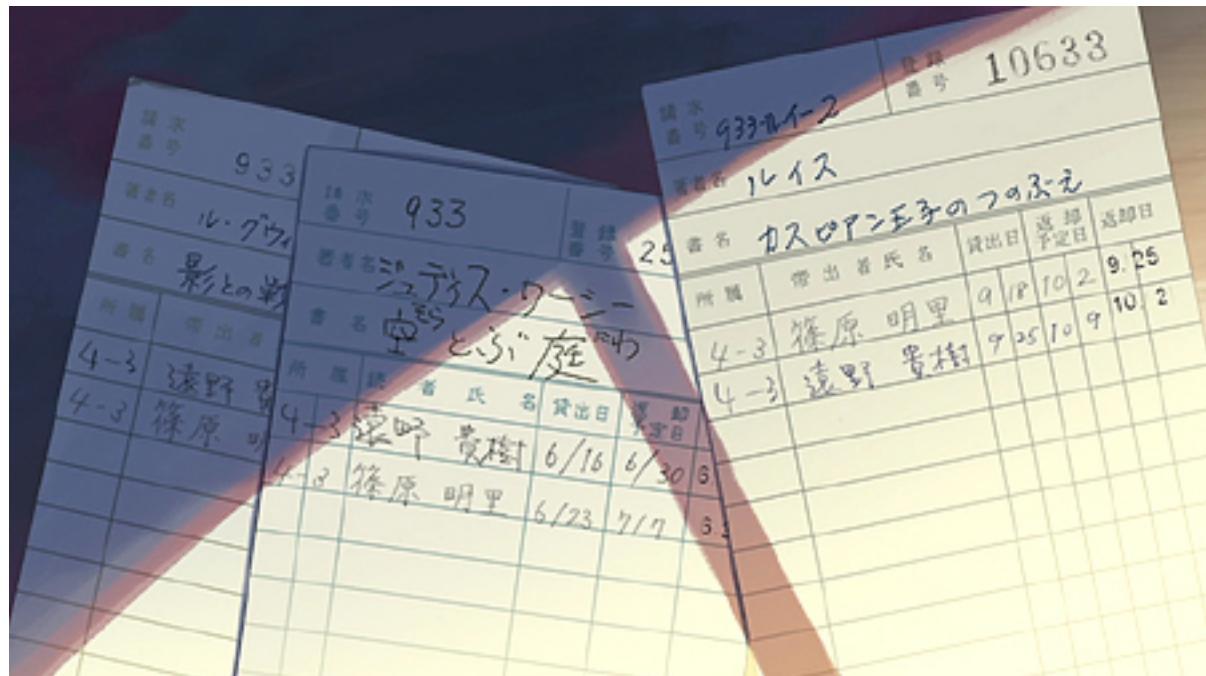
『綺麗だな。絵に描いたような美しさ、という比喩は、このことを言うのだろう?』

三人は、今までに見てきた CG や VFX が飾る派手な映像とは打って変わった、シンプルなアニメーション映画に微笑んだ。…そしてまた、マサユキは解説をはじめる。

「【秒速5センチメートル】というのは、桜の花びらが落ちる速度を意味するのですが、この映画のタイトル自体がメタファーであり、詩的な連想を促します。これは【新海誠】監督が作られたアニメーション映画です。アニメーションとは、所謂、パラパラ漫画の要領で、物が動く瞬間を少しづつ絵に描いてゆき、それを連續表示することで、本当に動いているように見せる手法です。SF 映画は、精密なミニチュア模型やコンピューター・グラフィックスを合成することで、現実を切り取った映像に過剰なディテールを加えるのですが、アニメーションは逆に、人間の手で、無から有を作り出す。だから頑張れば、緻密に描いた絵画を動かすことも出来るし、シンプルに描かれた漫画のキャラクターだけでも充分に魅力を伝えられます」

『確かに、綺麗な風景だけど、エスエフ映画に比べると、あまり動かないな』  
縫いぐるみは正直な感想を伝えた。マサユキは答える。

「そうですね。実はそこが、僕の気に入っているところです。アニメーション映画は、作るのに手間隙が掛かるので、多くの人達と作業分担をするのですが、新海監督は一人で作品を作ってきました。当然、パラパラ漫画風にキャラクターを動かすのは一人だと大変なので、その分、静止画である背景を緻密に描き、舞い散る花びらや鳥の羽ばたき等のシンプルな動きを挿入することで、結果的に詩的な効果を導いています。限られた制作環境でも、自分が最大限に出来ることを把握して、それを実行して、効果へと導く。そんな新海監督の姿勢に、僕は好感を抱いています」



(イメージ画像 新海誠／秒速5センチメートル から引用)

「わたしは、図書室のシーンが好きだな」

ミサは、液晶モニターに大写しになっている、図書室の貸し出しカードの映像を指さした。

「うん。主人公の貴樹くんと明里ちゃんは、小学校の図書室でよく出会ったんだよね。このシチュエーションは僕も好きだよ。僕も小学生の頃、図書室に入り浸ってたから、親近感が湧きます。本の貸し出しカードに二人の名前だけが書かれていて、静止画で映し出されるだけなんだけど、それだけで充分に気持ちが伝わりました。貴樹くんがモノローグで、声だけで情景を描写しているのも、いい感じです」

『そうか。情報量が少ない方が、逆に、人間の想像力は刺激を受けるんだな?』

縫いぐるみは、そう言った。

マサユキは嬉しそうに答える。

「どんなに想いを伝えたくても、ちょっと我慢して、話し過ぎない方が、代えって相手に伝わりやすいかもしない。大切なのは、お互いに、相手を察する【間】だと思います。新海

監督は、この感覚を熟知しているのかもしれませんね」



(イメージ画像 新海誠／秒速5センチメートル から引用)

「このお弁当のシーンも好き☆」

液晶モニターには、中学生の男の子と女の子が二人、深夜の駅の待合室で、彼女が作ってきたお弁当を食べるシーンが映っている。

「えっ？ このあとでキスをするよね？ そっちの方がロマンチックだと思うけど…」

「二人の想いが伝われば、一緒にお握り食べんのも、キスの代わりになるのよ☆」

「…そっか！ そうだよね♪」

マサユキとミサは、お互いに顔を見合わせて、笑った。

熊の縫いぐるみは、優しいガラスの瞳で、二人を見つめていた。

「…そろそろ、消そう！」

ミサは、いきなり叫んだ。

マサユキはまた、慌てふためく。

「えっ？ 秒速…、最後まで見ないの？」

「今日は一杯、DVDを見たじゃない。くまちゃんも疲れてるよ」

『大丈夫だ。それよりも、人間は沢山、映画と呼ばれる【夢】を作ってきたのが判った。本当は、夢ばかり見過ぎると、現実では動けなくなるのだが…』

熊の縫いぐるみは渋い声で、そう告げた。ミサは縫いぐるみへ手を伸ばして、そっと掴んで、自らの胸へと引き寄せた。まるで、母親が赤ちゃんを抱きかかえるように。

「だから、適度がいいのよね。秒速5センチメートルは、思い出を振り返るお話、なんだ。それって、たまに思い出すのが丁度いい。【思い出は綺麗だけど、それだけじゃお腹が空くわ】って歌もあったしね。…くまちゃん、知ってる？」

『そう言えば、腹が減ったな』

「ええっ！ ぬいぐるみもお腹が空くんだあ！ よーし、晩ご飯にしよー！ くまちゃんの好きな鮭の料理を作つてあげるね！」

『おお、何故、俺の好物を知つてゐる？ よし、俺も手伝うぞ！』

そして母子の二人は、仲良くキッチンへと向かった。

残された父親のマサユキは、DVDプレイヤーから取り出したディスクを持った姿、二人の後ろ姿を見つめていた。

鏡面状のディスクに、窓から漏れた夕陽の光が反射する。

「唯一の存在者によって夢見られる、広大な夢。その夢の中に出てくる全ての人物もまた、夢を見ている。あらゆる事柄が関わり合い、あらゆるもののが調和を保とうとしている」

ショーペンハウアーの言葉を、ふと、マサユキは思い出した。



(イメージ画像 新海誠／秒速5センチメートル から引用)

(…第七話へ続く。あと二回で最終回へ！)

## 熊の童話・第七話～「雨は夜更け過ぎに雪へと変わる」篇



(イメージ画像 M☆A☆S☆Hさんが撮影)

月日は流れて、三月の【あの出来事】から九ヶ月が過ぎ去っていた。

東京の街ではクリスマスの飾り付けが、幾つかと目に付きはじめている。

但し、心なしか、その飾り具合は去年に比べると…大人しい感じがした。

「ねえ、マサユキ。私達はクリスマス…どうしようか？」

ミサは、室内用の飾りが詰まった箱を抱えながら、少し困った顔で恋人に問いかけた。

マサユキはソファに座りながら、趣味の映画のムックを読んでいる。

【THE NIGHTMARE BEFORE CHRISTMAS】と、表紙に書かれている。

「そうだね。…今、思い出したけど、クリスマスって、キリストの誕生日じゃないよ」

唐突にマサユキは答えた。

「えっ！ そーなの？ だったらなんで、お祝いするの？」

ミサは、ゲゲッ、とした表情になり、抱えていた箱を床に落としてしまった。

箱の音にマサユキは驚き、読んでいる頁から、ミサの方向へと視線を移す。

そして、微笑みながら話しあ始めた。

「確かね、とある文化人類学者が言ってたんだけど、ヨーロッパではキリスト教が広まる以前から、【冬の祭り】が行われていたんだ。そこでは沢山の精霊が村々に来訪して、次の季節が豊穣になる約束を与えた。子供達は外に飛び出して精霊の代弁者役になり、豊穣の謝礼でもある贈り物を大人達からもらっていたんだ」

「それって、ハロウィンじゃない？」

ミサは突っ込む。

マサユキは話を続けた。

「うん。ごっちゃになってるかもしれないけど、太古の時代から【冬の祭り】は存在していたと学者さんは唱えているから、キリスト教が広まるにつれて、ハロウィンとクリスマスに分かれていった可能性があるね。元々、聖書にもイエス・キリストの誕生日は記載されてないから、教会が、豊穫を祝う祭りと誕生祭を上手く結び付けたかもしれない。そして、贈り物の要素が一人歩きして、サンタクロースがプレゼントを贈る設定になったのかもね」

ミサの顔が輝く。

「じゃあさあ、クリスマスはプレゼントを買ったり、ケーキを食べるお祭りではなくて、春が訪れるのを神様にお願いする祭りになるね☆」

「そうだね。今年はそんな気持ちでクリスマスを過ごしてもいいと思う。派手なお祭りを楽しむ意識ではなくてね」

マサユキは読んでいた本を閉じると、ソファから立ち上がり、それを書棚へと仕舞った。  
そして、別の本を手に取った。

表紙には【折口信夫】と書かれている。



(イメージ画像 [火と水の祭り—民俗文化の源流を探る](#) から引用)

「もう一人の文化人類学者は、日本の【湯神楽】という祭りを、ヨーロッパの【冬の祭り】とは違う感覚で紹介している。それは、冷え切った冬の夜に、大鍋で湯をぐつぐつと煮たてて、集まった村人に湯の雫を掛けたりするんだけど、学者さんは湯を煮る行為を、魂を増やす、という意味で捉えたんだ。冬の【ふゆ】は、【ふやす】に繋がる。…だから今年の冬は、東北で亡くなったりした人達の為に、物を贈るクリスマスではなくて、魂を増やす祭りが出来れば

なあ…と思ってるよ」



(イメージ画像 火と水の祭り—民俗文化の源流を探る から引用)

『面白い話をしているな』

野太い男の声が、足元から聞こえてきた。

先月からマサユキとミサの部屋に居候をしている、言葉を話すテディベアが、いつの間にか床に、ちょこん、と立っている。

ミサは、熊の縫いぐるみを抱き上げた。

「ねえ、くまちゃんはどんなクリスマスをしてきたのかな？」

『俺は冬眠している』

縫いぐるみは即答した。ミサは、あちゃあ、という顔になる。

「そーだよねえ…。本当は野性の熊さんだもんね。冬眠が当たり前、か…」

『何故、冬眠をするのか、お嬢さんは理由を知っているのか？』

縫いぐるみはまた、速攻で問い合わせ返した。

ミサは、びくっ、とした仕草になり、…さりげなく恋人へアイコンタクトをする。

代わりにマサユキが答えた。

「えっと…熊という動物が“本来から持っている性質ではないでしょうか？” 冬の時期は、熊が食べる木の実や魚が不足します。大きな身体を維持する為にも、秋に大量の食物を摂取して、体内にエネルギーを保存した状態で越冬する、…そんな仕組みと捉えてます」

『だから何故、俺の身体に、その仕組みが組み込まれているか、を聞いている。…まさか、人間が言う所の【神】が、熊を設計図通りに作った、と思ってるのではあるまいな？』

…マサユキは黙ってしまった。

口を閉ざした二人の人間を見つめながら、縫いぐるみは、少し笑った表情をした。

『まあいい。理由はともかくとして、俺は、冬に眠っている間に、【大地】と会話をする』  
「…眠りながら会話を？ …夢を見るみたいに？」

マサユキの問い合わせに、縫いぐるみはニヤリと笑い、話を続けた。

「大地とは即ち、俺やあんた達が棲む、この星、【地球】のことだ。俺は大地に穴を掘り、球状の空間を作り、その中で眠る。その場所は、子宮と同じ役割を担う。俺は、地球の胎児となり、母なる地球の鼓動に耳を澄ます。…そうやって、この星で生きていく方法を母から教わるのだ」

「…鼓動。即ち、母の声…」

マサユキは、そっと呟いた。

縫いぐるみは、ミサの元を離れて、マサユキの傍へと歩み寄る。

そして、彼が読んでいた【折口信夫】の本を覗き込んだ。

『【釈迦空】か。久しぶりだな、熊野の山で出逢った以来だ…』

縫いぐるみは頁を繰りはじめる。

『…草花は冬に枯れて、種を残す。葉を落とした木々は寒さに耐えて、春に芽吹く…』

頁を繰る縫いぐるみは、その動きを止めて、本を持つ人間の目を覗き込む。



(イメージ画像 熊から王へ カイエ・ソバージュ (2) から引用)

『…こんな話を知っているか？ あんたが先程、話していたヨーロッパという場所の祭りでもない、俺達が棲む、この島の湯神楽でもない、…あんた達が数百年前に勝手に【アメリカ】と名付けた場所の話だ。そこに最初から住んでいた人間は、夏に、野菜や穀物を育てて、動物や魚を狩猟して、自然から得た物を食べて生活した。しかし冬は、植物も動物も皆、姿を見せなくなる。だからこそ、夏に得た恩恵に感謝する為に、人間は、冬に、【自然に食べ

られる儀式】を行った。偉大なる精靈、人喰いの首長【バフバクアラヌフスィウェ】が、その儀式を指導する。そいつは、人間の驕り昂る心を喰らい、常に自然へ敬意を払うように調整をするのだ。…自然は、無尽蔵の贈り物を与えるはしない。全ての生命は、それを忘れてはならない。もし、その為來りを破ったならば、地球は、違反した者に罰を与えるだろう…』



(イメージ画像 東日本大震災—写真家 17 人の視点 (写真 平間至) から引用)

『三月十一日に、人間は、自然に食べられたのだ』

…縫いぐるみの、その一言がスイッチになったかのように、口を開ざしてきたマサユキが、突然、反論した！

「熊さん！ その発言は、某政治家の暴言と全く同質です！ 地震や津波を天罰と捉えたら、亡くなつた方々が報われない！ 今でも苦しんでいる人達を思うと…その言葉は失礼にあたりますよ！」

『それが、思い上がっている証拠だ』

縫いぐるみは毅然とした態度で返答をした。

『地震や津波は自然そのもの、だ。それを受け留めるのが、自然と共に暮らす生き物の、あるべき姿。人間は、自分達は悪いことをしていないのに何故、罰を受ける？、と思っているのだろう。それこそが、自己中心的な考え方なのだ。そこに気づかなければ、苦しみは和らぎはしない』

縫いぐるみは床に落ちた箱へ歩み寄り、中から、赤や金色のオーナメントを取り出す。

『綺麗ではないか。先程、あんたが話したように、この装飾を用いて、亡くなった人間達の魂を癒せばいい。人間の欲望を満たす資本主義の祭りから、自然を畏怖する敬虔な儀式へ変える。それだけで、人間の驕りは溶かされるだろう』

「…判りました。…それでも…」

マサユキは、何かを思い出したかのように、憂いの表情になる。



(イメージ画像→引用元)

『福島第一原子力発電所、か…』

縫いぐるみは、人間の脳神経から思考を読み取ったように返答した。

『…こんな話を知っているか？ あんた達が勝手にアメリカと名付けた場所で、原子爆弾の実験が行われた。その後に、俺達が棲むこの島に爆弾が落とされたのは、あんたも承知しているだろう。…話は戻り、その実験後の砂漠で、緑色をした硝子状の石が発見された。爆弾の高熱で、砂礫が変質したのだ。この硝子石は、旧約聖書に記された【ソドムとゴモラ】が、実在していたと謂われる場所でも見つかっている。…かつて神は、その巨大なる力で、人間を完膚無きまでに破壊した。…長い年月を経て人間は、神に匹敵する力を得たのかもしれない。しかし、今ではそれを、コントロールすることも出来ずにいる。…身の丈を知る、善い機会なのだろう…』

縫いぐるみは手に持っていたオーナメントを、くしゃっ、と、握り潰した。

人間は黙った併で、壊されたオーナメントの破片を見つめている。

…何処からか、クリスマスソングが、微かに聴こえてくる。

去年なら聞き流していたメロディも、今は、違う意味合いを感じてしまう…。

「僕達は、【鎮魂】と【試練】を、同時に受けなければいけないのでしょうか…」

マサユキは、声を震わせながら、そう言った。

「確かに今回の大震災が天災であるからこそ、失ったものが途轍もなく大きくても、いつまでも悲しんでいては前へ進めない。それは、僕も承知しています。…それでも、福島第一原発の事故は【人災】だという声を、あらゆる方面から耳にします。実際に福島県の人達は今でも苦しんでいます…。発電所の管理会社も、政府も、未だに困惑しているように思えます。…震災で亡くなった方々の魂を鎮めながら、それと並行して、未曾有の事故を処理していくのは…荷が重過ぎる…。日本人は、これ程までに巨大な十字架を背負わなければいけないのでしょうか…」

思いの丈を話し終わると、マサユキは、溜め息を吐いた。

ミサは、頑なな瞳で、恋人を見つめている。

縫いぐるみは、壊したオーナメントを握った併で、二人の表情を見比べた。

その後で、モヘアに包まれた両手に、再び、力が籠められる。

掌が瞬く。

壊したオーナメントは、元の形状へと戻った。

マサユキとミサの暗い表情は一変して、縫いぐるみの掌を凝視した。



(イメージ画像 火と水の祭り—民俗文化の源流を探る から引用)

『…こんな話もある。俺とあんたが共に、夏に暮らした場所、イーハトーボに古くから伝わる話だ。そこには大きな川があり、毎年、秋になると、大量の鮭が産卵の為に、川を遡上した。人間は秋鮭を漁獲して、生活を営んでいた。しかし、その年だけは不漁となり、人間は不安に苛まれる。川の両岸に各々の村落を築いて人間は暮らしていたが、不漁が村落同士の絆を脅かして、争うようになった。ある日、各村の鮭漁の帳付を担っていた男が、思い立ったかのように、川の中央にある白州へと渡り出て、両岸の村に聞こえるように大声で叫んだ。

【皆の衆、ようく聞いてくれ！　俺がこの場で死んで、争いを治めることとしたい。俺の首が流れる方と、胴体が流れる方で、各々の漁場としてくれ！】　…そう言うと男は、刀を自らの首根に突き立てて、力強く切り落とした。そして、人間の諍いは収まる…』

縫いぐるみは、話し終わった。

部屋に居る二人の人間は、まだ、口を閉ざした併でいる。

…雨は夜更け過ぎに、雪へと変わるだろう…。

聞き覚えのあるフレーズが、何処からか、忍び込んできた。

物事が変わる瞬間は、必ず、訪れる。

どんな時にでも。

「…僕は、どうすればいいのでしょうか…」

マサユキは、そう言った。

『あんたの思うことをすればいい、と、以前に俺は告げたはずだ』

熊の縫いぐるみは答えた。

「…でも、マサユキには仕事も生活もあるから、無茶は出来ないよ…」

ミサがフォローする。

「それでも、もし、何かが出来るのであれば、…復興にしても、原発事故の対応でも…、僕個人の力を、役立たせたい。恐らく、この想いは、日本人なら誰でも持っているはずです。確かに、現実は厳しくて、寧ろ、今でも混沌としているからこそ、支援に疲れを感じてしまい、逃げ出す人もいるかもしれません。頑張っている人と、逃げている人の、軋轢も生まれるかもしれません。…それでも、全ての人達の、心が、折れてしまう前に…たった一人でもいいから、何かが出来ないか？ …そう、考えてしまうのです…」

…必ず今夜なら、言えそうな気がして…。

聞き覚えのあるフレーズが、そう告げた。

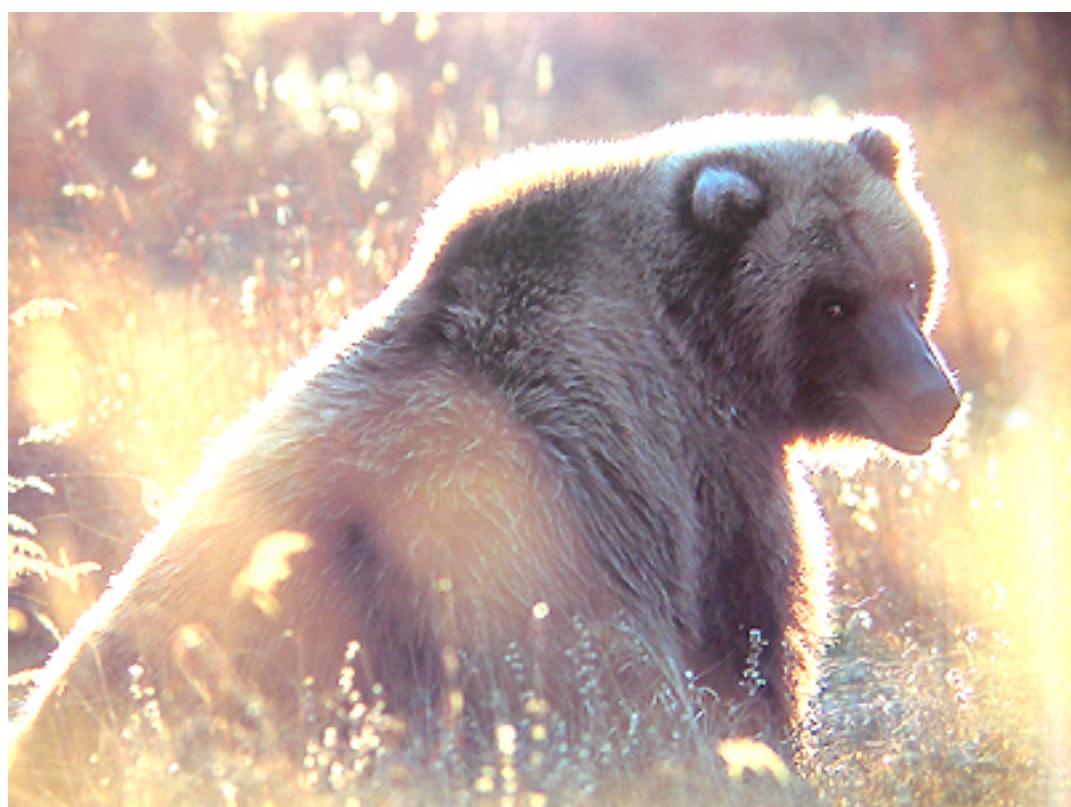
『よしっ！ 再び、【ドリームタイム】を与えよう！ あんたは、あの夏の一時に、俺を、イーハトーボの幻視を呼び寄せた。それは、あんた自身が抱える弱さを溶かして、本来から備えていた強さを導いていった。今、あんたがそれ以上の【己】を望むのならば、より強力

な【気づき】が必要になる！』

そう、言い終わるや否や、熊の縫いぐるみの全身を纏うモヘアは、淡く、光りはじめた。

その光は眩しさを増してゆき、小さな縫いぐるみの身体を完全な光のシルエットへと変えていった。

シルエットはゆっくりと膨らみ、マサユキとミサの部屋の天井へ届かんばかりの大きさにまで、形状を変えていった。



(イメージ画像 星野道夫の仕事3-生きものたちの宇宙 から引用)

そして、熊の縫いぐるみは、本物の熊になった。

マサユキという青年が、夏に出逢った、あの熊の姿に戻った。

熊は青年に鼻面を向けて、一声を吠えた。

『さあ、一緒に行こう！ 福島第一原子力発電所へ！』

(…次回、最終回へ！)

(参考文献： 中沢新一 カイエ・ソバージュ)

## 熊の童話・最終話～「最善であることを願おう、不安を拭いながら」篇

ドリームタイム。

古代の人間は瞑想に耽ることで、目を閉じて、目蓋の裏に新たなる兆しを感じた。

現代人は科学的根拠や論理に基づいて行動し、そこを逸脱すると硬直する。

例えば、ウラン 235 という化学物質の核分裂から発生する高放射線は、生物の免疫細胞を破壊する。

現代人は被曝を怖れる。

この科学的根拠を、古代に生きる者は、どう捉えるだろうか？



(イメージ画像 [Pieter Brueghel The Elder, The Tower Of Babel.](#) を引用)

熊はマサユキを背に乗せて、東京から福島に向けて疾走した。

日は暮れている。

遂に二人は、福島第一原子力発電所の敷地内へと侵入する。

そこには、立方体の形状をしたコンクリートの建屋が数箇所、建ち並んでいた。

上層部に剥き出しの鉄骨を覗かせている建屋がある。

白いプラスチック状のパネルで全体を覆う建屋もある。

クレーン車両が何台か停まっていて、何らかの工事が進行しているのが伺えた。

マサユキは熊に向かって説明をする。

「この敷地内にある原子炉の内、三機の炉心が事故を起こして、核燃料が溶けはじめています。今は循環型の浄化装置を使い冷却していますが、それが少しでも止まると核燃料は臨界して爆発するかもしれません。我々が行わなければいけないのは、この核燃料を取り出すこと。そして、敷地内に溜まった高濃度汚染水と、半径 20 キロメートル圏内の警戒区域に散った放射性物質を除染することです」

熊は返答する。

『よし、判った！ あんたが核燃料を取り出すんだ！ 除染は俺がやろう！』

「…でも、…どうやって？」

マサユキは戸惑いの表情になり、熊へ問い合わせた。

鼻息を荒くして、熊は吠える。

『あんたの思う通りのことをやればいい。どうすれば、細胞を破壊されずに原子炉に近付けるのか？ …それを考へるのだ！』

マサユキは、目を閉じる。

そして、目蓋の裏に現れるものを凝視した。

放射線や放射性物質と呼ばれる物の、その色や匂いを、感じようとした。

生物は何故、高放射線を浴びると生体機能を失うのか？ …その意味を考えた。



(イメージ画像 Carlo Crivelli, Saint Michael. を引用)

マサユキの肌が、淡く、光りはじめる。

群青色の敷地内に一点、マサユキの発光があたたかい色を染めてゆく。

…やがて、発光はゆっくりと収まってゆく。

マサユキの肌は鉛色になる。

文字通りに、鉛の物質に変換されたのだ。

鉛のマサユキは敷地内に踏み出して、白いパネルに覆われた建屋へと向かう。

壁に手を触れる。

“口リ、と、プラスチックが溶ける。

ゼリー状になった壁に身を埋めながら、鉛の男は、真っ直ぐに歩き続けた。

次々と壁抜けを繰り返しながら、目的地である原子炉の格納容器へと向かった。

格納容器には、冷却水が並々と溜まっていた。

その上部には水蒸気が渦巻いている。

空間の中央に、鈍色の圧縮容器が鎮座している。

その下部には穴が空き、何かが垂れ出した形跡があった。

鉛の男は冷却水の中に顔を浸し、底面を確かめてみる。

その場所には、赤色に瞬く象の肌のような物質が付着していた。

鉛の男は深く潜ってゆき、象の肌に向かって手を伸ばして、指先にその一端を触れる。

…すっ、と振り上げると、核燃料と石質の溶解物は溶けた飴玉みたいに掌にへばり付き、一瞬でオレンジ色のボールと化した。

鉛の男は、重々しく口を開ける。

ごぼっ、と、泡が漏れる。

そして、核の飴玉を一息に呑み込んだ。

鉛の男は、こびり付いた核燃料を掬っては飴玉にして、呑み続けていった。



(イメージ画像 [Frans Floris, Het Gevecht Van De Opstandige Engelen.](#) を引用)

中央制御室の夜勤担当者が、その異変に気付くのに時間は掛からなかった。

原子炉一号機の圧力容器内の温度が、急激に下降している。

制御担当者は内線受話器を上げて、同僚の夜勤警備員へ緊急事態を告げた。

警備員は放射能汚染防護服に着替えて、冬の夜の敷地内へと躍り出る。

一号機建屋を目前にした瞬間、警備員は思わず、その足を硬直させた。

建屋の壁から…全長3メートルもある大男が、とろり、と抜け出てからだ。

それは、漏れた核燃料を全て呑み込み膨張した、鉛の男だった。

鉛の大男は完全に姿を現すと、ゆっくりと原子炉二号機の建屋へと闊歩する。

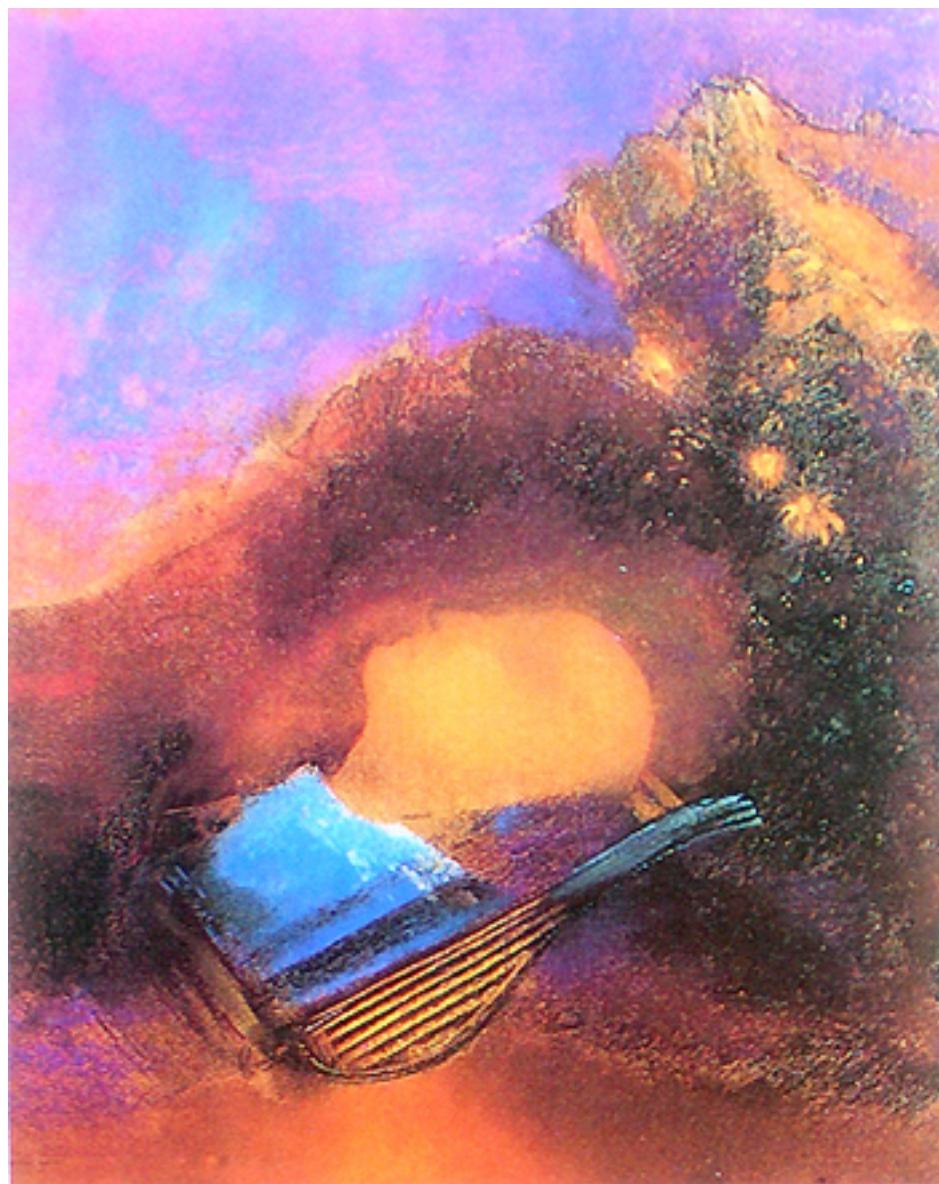
分厚い鉛の肩から、腋下から、湯気が漂っていた。

「彼は、底知れぬ場所に居る使徒の主である。其の名をヘブライ語でアバドンと謂う…」

警備員は、新約聖書の一節を口ずさむ。

『第一の禍いは去った。見よ！ …この後に彼は、猶二つもの禍いに立ち向かうであろう！』

警備員の背後から、熊は、人間の言葉を補足した。



(イメージ画像 Odilon Redon, Orpheus. を引用)

格納容器の中で核燃料の飴玉を食べながら、鉛の大男は…回想していた。

…あの夏が終わった日に、マサユキと呼ばれていた青年の頃に、何故、熊に向かって…自らの肉体を食べて欲しい、と言ったのか？

喰われることは、死、を意味する。

2011年3月11日、多くの人達に、死、が襲い掛かった。

青年は生き残った。

それでも、亡くなった人達の代わりに、その人達の分まで生きていったとしても…一体、何が出来るのだろうか…。

自信がなかった。

だから、自分も皆と一緒に…。そう、思っていた。

しかし、熊は、青年を食べなかった。

その代わりに熊は、自然に食べられることで自然への敬意を再認識する儀式を、古代人が行っていたのを教えてくれた。

…3月11日とは、現代の人間が自然に食べられる儀式、だったのかもしれない。

生き残った人間は、痛みを感じた。

打ちのめされて、逃避してしまった人間もいるかもしれない。

そして…何かに気づいた人間もいるだろう。

…今、僕は核燃料を食べている。

僕の身体の中で核燃料は、人間の細胞を破壊し続けて、僕は少しづつ人間で無くなる。

この臨界寸前の不安定な物質は、僕達が棲む人間の世界にあってはならないものだ。

これらを全て取り除いて、何処かへ封印しなければならない。

ドリームタイムは、この事実を判りやすく教えてくれている。

夢から覚めても、現実に於いても、どんなに時間が掛かっても、この事実を忘れてはならない。

それがドリームタイムが伝える、メッセージ、なのだ。



(イメージ画像 Odilon Redon, Cyklops. を引用)

鉛の大男は全ての溶け出した核燃料を食らい尽し、建屋の屋根を越える全長 10 メートル以上の巨人と化していた。

敷地内に居る人間は全て、集まっていた。眠っていた者は皆、目を覚ましていた。

その人間の群れの中に、熊が居た。

鉛の巨人は小さな姿の熊を確認して、見下ろした何ん、唇を振動させた。

『…熊さん。除染をお願いします…』

エコ一掛かった巨人の聲が、熊の頭上に響く。

『よしつ！』

熊は身震いをして、深く、大きく、息を吸い込む。

…凄まじい風が熊を中心に渦巻きはじめて、塵が、付着した放射性物質が、熊の口腔へと吸い込まれてゆく。

その風は敷地全域に届き、全ての建屋を振動させた。地下の汚染水にも干渉した。

人間だけが飛ばされないように、障害物へ不格好にしがみ付いていた。

…突然、風が止む。

人間は安堵の表情になり、姿勢を正す。

見上げると…鉛の巨人の隣りに、山のような大きさの熊が四肢を踏み締めていた。

『敷地内の放射性物質は全て、俺が呑み込んだ。高濃度汚染水も浄化している。後は…福島県全域の除染だ！』

山のような熊は鳴動して、頂の鼻面を北へと掲げる。

鼻先が示す遙か先に、一点、星が瞬く。

その星は、ぽつりぽつり、と数を増やして、無数の光を散りばめた星雲と化す。

それは…人間の魂の塊、だった。

福島県から…宮城県、岩手県から…地震と津波で亡くなった二万に及ぶ魂が結集して、福島第一原子力発電所の夜空を輝かせていた。

警戒区域で亡くなったペット達の魂も一緒だった。

『私達が皆、力をあわせて、福島県を除染します』

二万の魂が、そう告げた。

そして、二万の星々は、大きな翼を広げるようにゆっくりと動きはじめて、西に向かって、内陸に向かって、各々が散開していった。



(イメージ画像 [Dante Gabriel Rossetti, Ecce Ancilla Domini.](#) を引用)

…夜が、明ける。

冬至過ぎの太陽が、寝坊をしたかのようにスローモーションで昇ってゆく。

鉛の巨人と山のような熊は、東側の海岸で仁王立ちして、遅い日の出を見つめていた。

二体の巨体の、荒々しい肉体を構成する箇所の一つひとつがオレンジ色に染まる。

人間は集まり、あたたかい色彩を纏う巨体同士を、遠くから見守っていた。

…西の空から星々が戻ってくる。

二万の星々は、鉛の巨人と山のような熊の、各々の肩の上に集りはじめた。

二体の巨体は、星々の中に笑顔があるのを確かめた。

「マサユキっ！」

…人間の集まりの中から、悲痛な女性の声が響いた。

ミサ、だ。

彼女は一人だけで海岸に向かって駆けてゆき、鉛の巨人の足元へ寄っていった。

そして、かつての恋人の表情を確かめようと、思いっきり、顔を振り上げた。

…全身が鉛と化した巨人に、人間の面影はない。

それでも、彫像のような顔面の奥には、かつてのマサユキの瞳が残っていた。

ミサは見上げた俊、何も言えずに、唇を震わせている。

恋人の瞳だけを、じっと、見つめている。

…ふと、巨人の瞳が、微笑んだ。

『…ミサ。また、会おうね。…夢の中で』

ミサも、くしゃくしゃに微笑んだ。

「うん！ 夢、だね☆ 待ってるよ、マサユキ♪」

ミサは永遠の恋人に向かって、大きな声で想いを伝えた。

一粒の涙がこぼれた。

太陽は完全に昇りきった。

山のような熊は鉛の巨人を小突き、頂の鼻面を東の空へ向ける。

『さあ、行くぞ！』

『はい、熊さん！』

肩に集まっていた二万の魂が、再び翼を広げて飛翔してゆく。

そして、彼等と同じように、鉛の巨人も、山のような熊も発光して、荒々しい巨体が星屑のように分かれて、その一つひとつを昇天させてゆく。

群青とオレンジが混じりあった空に、汚れなき星々が、純白の光を添えていった。



(イメージ画像 Jean Honore Fragonard, The Swarm Of Cupids. を引用)

(熊の童話、完！ SPECIAL THANX, 【純】【maco】【さん子】&アメブロフレンド&ツイッターフォロワー！ …皆さん、蔭ながらの支援、ありがとうございました☆)

## あとがき

改めまして、最後まで「熊の童話」を読んで頂き、ありがとうございます。

読まれた方は、読後に、どのような想いを抱かれたでしょうか？

はじめにも記したように、この小説は、2011年東日本大震災の直後にアメーバブログで連載したものを、電子書籍にローカライズしています。

当時の僕は震災影響で職を失い、長期の求職活動の真っ最中でした。

生活資金を借りながら活動してましたが、簡単に仕事は見つかりません。併せて、被災地の様子や、福島第一原子力発電所の事故対応を耳にしては、自分自身の大変な状況と現実の深刻な状況が相まって、日々、不安に苛まれていました。

そのような状況の只中で、僕は突然に「熊の童話」を連載することを決意します。

この決意の「理由」は、時が経つ今になっても、明確に捉えることができません。

単なる現実逃避だったのかもしれません。

とにかくにも、僕は、仕事探しの合間を縫って、一ヶ月で二話、四ヶ月で八話分の話をリアルタイムに考えていきました。

実はPCが壊れていたので、原稿用紙に文章を書いて、ネットカフェでアメブロのエディターにその文章を入力していました。

求職活動とは無関係の時間を費やし、傍から見れば真剣に仕事探しをしていないと言われそうですが、その時の僕にとってはどうしても「物語を語ること」が必要だったのです。

あまり自分のことを熱く語ると、胡散臭がられるかもしれませんね（苦笑）

今は、震災直後に謳われた「絆」「Pray For Japan」の言葉が、恥ずかしくなっている時代かもしれません。

2012年の夏に「原発反対」と叫んだシングル・イシューも同様に、恥ずかしくなっているかもしれません。「世知辛い世の中」という言葉が未だに似合う気がします、この国は。

だからこそ、恥ずかしいけれど勇気を出して、この童話を、ここに残しておきます。

また時が経ち、あの時のことと思い返すことがあるかもしれない。

その時にこの童話を読み返すことで、忘れていた何かを思い出せればいい。

辛い現実にドラマティックな物語を織り交ぜることで、「ドリームタイム」と言われるアボリジニの神話のような物語を挿入することで、現実の凝りをほぐし、ほころびを繕う「物語による癒し」「物語による鼓舞」というものが、この童話から見出すことができるのなら、何よりも嬉しいです。

最後に。

熊の童話を書くにあたって、震災直後から被災地で奮闘されていた知人の「mocoさん」「さん子さん」とのやり取りが、何よりも執筆の原動力となりました。この童話は彼女たちに捧げていると言っても過言ではありません。改めてこの場を借りて、彼女たちに御礼を申し上げます。

そして、詩人の「伊万里純さん」の詩の影響が、この童話の文体の隅々にちりばめられています。第四話で主人公が語る公園のベンチの件や、別れた彼女の部屋の件は、純さんの詩がベースになっています。実は、熊の童話の主人公の青年は、純さんの詩に登場する青年をモデルにしているのです。彼にもこの場を借りて、敬意を表したいと思います。

併せて、熊の童話の最終話をアメブロに掲載した 2011 年 12 月 24 日に、「クリスマスの奇蹟がもしかもあるのなら」という題名で、最終話をシェアしてくれた、文芸評論家の土居豊さんにも感謝いたします。既に述べたように、この童話は、自分自身と、特定の人たちに向けて書きはじめました。気がついたら、評論家の方に御目に留めて頂けて、光栄に思っています。改めて、物語そのものの力が導いた御縁というものを、大切にしたいと思っています。

また機会がありましたら、アメーバブログに掲載していた記事を、映画や音楽や文学に関するサブカルチャー系の評論もどきを（笑）、電子書籍にローカライズして無料公開したいと考えています。

併せて、もしご興味がありましたら、有料コンテンツである、

「[Thich Quang Duc] 師は絶え間無く燃え滾る」

も、「熊の童話」と同様に、楽しんで頂ければ嬉しいです。

但し、癖の強い小説ですので（苦笑）、本当に「挑戦してみよう！」と思う方にお薦めいたします（笑）

それでは、また機会がありましたら、お会いいたしましょう！

2013 年 6 月 30 日 M☆A☆S☆H

## 著者プロフィール



著者名「M☆A☆S☆H（まっしゅ）」 本名は大田正之。俳句を詠む時は「摩衆」を名乗る。  
1966年生まれ。東京デザイナー学院アニメーション科卒業。  
アニメーション制作、ゲーム開発、3DCG制作、WEB制作などを務める。工場での肉体労働、人材派遣会社の支店長経験もあり。現在は医療系に従事。  
アニメやゲームの実績は「となりのトトロ」「AKIRA」「スーパーロボット・シーティング」「ずんずん教の野望」がある。  
小説は2000年代から書きはじめる。数作品を出版社に投稿（殆どが落選） そのうちの「TEDDYBEAR COUNSELOR おしゃべりするティディベアと、繊細な男の子の物語」を自費出版する。  
2011年の東日本大震災直後に、アメーバブログで「熊の童話」を連載する。

自分自身の作風を記すのは主観的になるが、ゲームの仕事をしていた時には「紫色の宇宙を描く男」「ドロドロとしたサイバーパンクの体臭が漂う」と言われる。  
また、アニメの仕事の時には「韓国にも上手いアニメーターがいるね」と庵野秀明氏に言われる。  
(当時の韓国のアニメーターは描画線が荒く、似たような線質でありながらもダイナミックな動きを描く自分自身の作風に対しての、皮肉を籠めた讃美言葉だと捉えている)  
これからも人生の水面下に於いて、小説を執筆していきたいと思っている。  
ティディベアに象徴されるイノセント性と、中沢新一氏やジョゼフ・キャンベル氏から影響を受けた文化人類学視点（伝奇的視点）を活かした作風を追求したいと考えている。

奥付

書名 熊の童話 2011年3月11日のドリームタイム儀式

著者 M☆A☆S☆H

電子書籍プラットフォーム ブックログのパブー／株式会社ブックログ

電子書籍プラットフォーム Kindle ダイレクト・パブリッシング／Amazon

初版 2013/6/30

第六版 2013/8/11

(C) M\*A\*S\*H 2013